

令和5年度 スポーツ指導者海外研修事業 帰国者報告書

2023



スポーツ指導者海外研修事業 令和5年度帰国者報告書目次

令和2年度長期派遣（2年）	
見汐 翔太（サッカー）	3
令和3年度長期派遣（2年）	
嘉数 陽介（ハンドボール）	19
令和4年度長期派遣（1年）	
金城 芳樹（スキー）	35

○令和2年度 長期派遣（2年）1名

競技団体		(フリガナ) 氏 名	研修項目	研修先	研修時期
1	サッカー	ミシオ ショウタ 見汐 翔太	イングランドのプレミアリーグに所属するSouthampton FCにおいて、選手育成と分析の取り組みを学ぶ。	イギリス (ロンドン)	令和4年1月13日～ 令和6年1月20日

※新型コロナウイルス感染症の影響等により、令和4年1月13日より研修開始

○令和3年度 長期派遣（2年）1名

競技団体		(フリガナ) 氏 名	研修項目	研修先	研修時期
1	ハンドボール	カカズ ヨウスケ 嘉数 陽介	<ul style="list-style-type: none"> デンマークトップリーグにおけるチームマネジメント・コーチングを学ぶ デンマークの競技力を支えるタレント育成環境について調査する 	デンマーク (オーフス)	令和3年10月29日～ 令和5年10月28日

○令和4年度 短期派遣（1年）1名

競技団体		(フリガナ) 氏 名	研修項目	研修先	研修時期
1	スキー	キンジョウ ヨシキ 金城 芳樹	<ul style="list-style-type: none"> スロベニアチームのコーチング方法 ジャンプのトレーニング方法 	スロベニア (プラニツァ)	令和4年12月5日～ 令和5年12月4日

研修員報告〈サッカー 見汐 翔太〉



令和2年度・長期派遣（サッカー）

I. 研修題目

イングランドのプレミアリーグに所属するSouthampton FCにおいて、選手育成と分析の取り組みを学ぶ。

II. 研修期間

2022年1月13日～2024年1月20日

III. 研修地及び日程

（1）主な研修先

Southampton FC

（2）受入関係者

Andy Martino (Southampton FC)

Joseph Cole (Southampton FC)

Chris Melly (Southampton FC)

宮原 継享氏

（3）研修日程

通常研修：Southampton FC

日程 2022年1月13日～2024年1月20日

内容 The Southampton's Wayにおける選手育成および分析の研修

特別研修1：The FA

日程 2022年2月1日～5月31日

内容 女子技術委員長との対談及びWeb面談

IV. 研修概要

（1）研修題目の細目

- ①イングランドのサッカーについて
- ②Southampton FCについて
- ③Southampton FCの育成
- ④Southampton FCの分析
- ⑤特別研修について

(2) 研修方法

Southampton FCのFootball Development ManagerであるAndy Martino氏から、クラブの育成指針であるThe Southampton's Wayを通して育成方法論を学ぶ。また様々なカテゴリーのパフォーマンスアナリストやデータアナリストから分析方法を学ぶ。

(3) 研修報告

① イングランドのサッカーについて

【イギリス内のサッカー協会】

イギリスはイングランド、ウェールズ、北アイルランド、スコットランドの4つの地域から構成され、人口は日本の半分に当たる約6,700万人であり、そのうちの約5,600万人がイングランドに集中している。4地域がそれぞれサッカー協会（FA：Football Association）を有しておりThe FA、FA of Wales、WIrish FA、The Scottish FAと称している。国際サッカー連盟（FIFA：Federation Internationale de Football Association）は1つの国に1つのサッカー協会を原則としているが、イギリスには4つ存在しており各代表チームを有している。その所以は、The FAが1863年に世界で最初に設立された協会であり、1904年に設立されたFIFAよりもおよそ40年前から本土4協会とともに既に独自で運営していたためとされている。FIFAはこのイギリス4協会の承認以降、一定の自治がなされている地域に対しては協会としての加盟を承認している。しかし、国際オリンピック委員会（IOC：International Olympic Committee）は各国に1つのオリンピック委員会単位で出場を承認するため、イギリスは4地域ではなくイギリス代表（グレートブリテン代表）として統一されている。

【イングランドサッカーの近年の発展】

The FAは2012年にナショナルフットボールセンターとなるセントジョージズパークを約157億で建設し、よく知られている2012年のElite Player Performance Plan（EPPP）や2016年のEngland DNAなどの長期的な育成の取り組みにより、男女ともにワールドカップで着実な成果を上げている。イングランドは2017年にU-20ワールドカップとU-17ワールドカップを共に初優勝した。スリーライオンズと称される男子A代表は2018年のロシアワールドカップでベスト4となり、2021年のUEFA欧州選手権で準優勝まで上った。ライオネシーズこと女子A代表も2015、2019年の女子ワールドカップで続けてベスト4以上の成果を上げ、EURO2022では自国開催で初優勝を果たした。世界の中でも協会の取り組みが大きな成果に現れている国の一つと言える。

国内リーグに目を向けると、イングランドはプロサッカーリーグの1部に当たるプレミアリーグ（The Football Association Premier League Limited）を1992年に設立し、現在でもヨーロッパ5大リーグ（他スペイン、ドイツ、イタリア、フランス）の1つに数えられている。競技水準はもちろんのこと、新型コロナウイルス感染症拡大以前のプレミアリーグの2019年総収入額は年間約7,300億円に上り、世界で最も財政規模の大きなサッカーリーグとなっている。Jリーグの総収入額は同じ年で90億円であった。

クラブ数は異なるが、プレミアリーグの規模の大きさが伺える。私の研修先である Southampton FCは、そのプレミアリーグに所属しているクラブである。

②Southampton FCについて

【クラブの特徴】

サウサンプトンとはイングランドの港町として知られる人口27万人程の都市であり、首都ロンドンからは南西に1時間半程離れた場所に位置する。Southampton FCはこの場所で1885年にセントメリーズ教会が創設したサッカークラブであり、現在本拠地のスタジアム名はセントメリーズスタジアムであるのはそれに由来する。赤と白の縦縞がクラブの象徴的なカラーとなっている。日本との繋がりとしては、日本代表のキャプテンを務めたDFの吉田麻也選手やFWの李忠成選手がプレーしていたクラブとして知られている。

このクラブは2011-2012シーズンのチャンピオンシップでプレミアリーグの昇格を果たし、2012年から現在までプレミアリーグに所属し続けているが、ビクトイットルをほとんど獲得していない。しかし、イングランドで最も選手育成力のあるクラブの一つとして有名となっている。特に2012年から2015年は顕著であり、Southampton FCのアカデミー出身選手の売却で得た収益は約120億円となりヨーロッパで最も育成で収益を上げたクラブであったと言われている。イングランドの中では比較的低予算で運営され、いわゆる選手の売り手クラブとしても知られている。しかしその経営力、アカデミー、そしてクラブ全体に浸透する明確なビジョンに定評があり、世界のトップリーグで存続できる理由だと考えられている。

【アカデミー出身の主な選手】

Southampton FCはアカデミーの育成に非常に大きな誇りと自信を持っている。クラブ施設のいたるところにアカデミー出身選手の写真やイラストが飾られており、また施設の各部屋にも選手の名前が付けられている。これらがクラブのアイデンティティを示すだけでなく、アカデミー選手の希望やモチベーションとなっている。以下にアカデミーの成果と言われる選手達の一部の例を挙げる。Southampton FCのアカ



アカデミーの食堂の壁



アカデミー施設の部屋に付けられている
OB選手の名前

デミーは様々な記録を打ち立てる選手達を育成していることが伺える。

▶ ギャレス・フランク・ベイル

トッテナムやレアルマドリードなどで活躍しているウェールズ代表FW。10歳から16歳までアカデミーに所属し、16歳と275日でプロデビューを果たした（ウォルコットに次いでクラブ史上2番目）。トッテナムが移籍金約11億円で獲得した。また、16歳315日のウェールズ代表最年少デビュー記録を保持している。

▶ セオ・ジェームズ・ウォルコット

アーセナルやSouthampton FCなどで活躍しているイングランド代表FW。11歳から15歳までアカデミーに所属し、15歳と175日でクラブ史上最年少のトップチームのベンチ入りを果たした。2006年にアーセナルが移籍金約24億円で獲得した。アンの背番号14番を引き継いだ選手。

▶ アラン・シアラー

1990年代を代表するイングランド代表FWで代表キャプテンも務めている。16歳から18歳までアカデミーに所属し、Southampton FCやニューカッスルなどのクラブで活躍した。プレミアリーグの通算260ゴールは歴代最多記録。偉大なサッカー選手とされているFIFA 100に選出されている。

▶ ジェームズ・ウォード・プライズ

8歳からアカデミーに所属し16歳でSouthampton FCのトップデビューを果たす。アカデミー生え抜きのクラブキャプテンとして活躍し300試合出場を達成している。アンダーカテゴリーのイングランド代表でもキャプテンを努めており、現在もイングランド代表MFである。アカデミーを象徴し、模範とされる選手として愛されている。

【トレーニング施設】

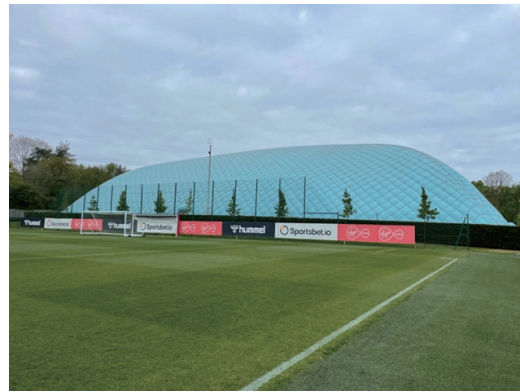
サウサンプトン郊外に構えられているステイプルウッドキャンパスがSouthampton FCのトレーニング施設となっている。ステイプルウッドキャンパスはThe FAから最高ランクTier 1の認定を受けているフットボール施設である。この認定制度のランクに応じて育成カテゴリーのチームが参加できるリーグが異なり、受けられる補助金額も変わるため、施設への投資はとても重要なポイントとなっている。ステイプルウッドキャンパスはトップチームとアカデミーの施設が併設されており、選手やスタッフが交流しやすい環境となっている。セキュリティの環境が整っており、トップチーム以外のカテゴリーでも基本的には関係者以外が入れないようになっている。サッカーピッチは子ども用サイズを含めて全部で11ピッチ設けられている。ピッチ1、2はトップチームとU-23専用の天然芝グラウンドであり、アカデミー関係者も侵入は制限される。ピッチ3、4にはスタンドがあり、主に11人制の公式戦はここで行われ



ステイプルウッドキャンパス



ピッチ3・4のスタンド



全天候型DOME



アカデミー用のトレーニングルーム



DOME内でスクリーンを使ったミーティング

ている。スタンドには試合用のTV画面付きのロッカールームやシャワー室が完備されている。DOME（全天候型サッカーピッチ）と3Gピッチのみ人工芝を採用しているが、それ以外はすべて天然芝であり毎年8月に掘りおこしを行ってグラウンドの質を維持している。またグラウンド脇の柱には固定カメラが設置されており、毎回のトレーニングを録画してすぐに映像を確認することができる。毎回ボールを立ててカメラの準備をしたり、雨天を気にしたりする必要がないためパフォーマンスアナリストの助けにもなっている。イングランドでは育成年代の年齢に応じて公式戦のピッチサイズが異なるため、P5からP9までのピッチは各カテゴリーの公式戦サイズとなっており、ゴールサイズも同様に整えられている。

【選手的环境】

U-9から全てのカテゴリーがこのステイプルウッドキャンパスでトレーニングを行っている。表が示すように選手はカテゴリー毎に通える地域の範囲が指定されているため、その範囲で選手のセレクションやスカウトが行われている。U-12以上になると選手が保護者の手助けなしに自分でステイプルウッドキャンパスに通えるようになるため、選手をより広い範囲から選びやすくなるというのが現場の感触である。U-16以上になるとホームステイの環境を充てがわれるため、更に遠方地域から選手をスカウトできるようになっている。アカデミーは現在寮を持っておらず、全部で45箇所のホストファミリーの環境を揃えている。大抵の選手は複数名で1つのホー

ムステイ先に滞在している。寮の建設も検討中である。Southampton FCは全15名のスカウトスタッフを抱えている。そのうちプロパー契約を交わしているスカウトスタッフは3名おり、アカデミーではU-9～U-11、U-12～U-16、U-17以上のカテゴリーにそれぞれ1人ずつ配属されている。その他パートタイム契約のスカウトスタッフは全カテゴリーを網羅的に把握する役割となっている。

Category	Home Location	off school
U-9	within 1 h	half day / w
U-10	within 1 h	1 day / w
U-11	within 1 h	1 day / w
U-12	within 1 h 30 min	2 day / w
U-13	within 1 h 30 min	2 day / w
U-14	within 1 h 30 min	3 day / w
U-15	within 1 h 30 min	3 day / w
U-16	Host family	※ Learning program
U-17	Host family	※ Learning program
U-18	Host family ※ Dormitories are being considered	※ Learning program

【学習サポート】

Southampton FCのアカデミーは地域の学校と連携を図りながら選手のスケジュールをコントロールしている。アカデミーに所属している選手はU-9の時期から学校のカリキュラムの時間を削ってトレーニングすることが認められている。学校のカリキュラムを削る時間には制限が定められており、表からわかるように年代が上がる毎にその許容範囲が広がっている。但し、学校の成績や態度が悪い選手にはこのルールが適用されず、学校のカリキュラムがある時間はトレーニング



ピッチの隣にある学習室

ができなくなる仕組みとなっている。学校を休むことにより、主に個別トレーニングやフィジカルトレーニングの時間を確保しやすくなる。しかし実際には、子ども達の生活の基本となる学校時間を割いてトレーニングをさせることにクラブのスタッフからは賛否両論があり、少しずつ学校を休む時間を減らしていく傾向になっていた。むしろアカデミーは学校の学習サポートにも力を入れている。

U-15までのカテゴリーには学校教科の学習サポートがある。そしてU-16とU-17のカテゴリーにはBTECというイギリスのカレッジ卒業資格に相当する学習プログラムが設定されている。これらは2年間の実践的専門教育カリキュラムとなっており就職率90%以上の成果を上げているプログラムである。Southampton FCの選手達は主にスポーツサイエンスの分野を学び、サッカー選手として自立するためだけでなくセカンドキャリアを踏まえた準備ができるようになっている。カリキュラムの内容は栄養、スピーキング、メンタルトレーニング、ファイナンスなど多岐にわたる。また海外での一人暮らしを想定したクッキングやクリーニングといったライフスキルのカリキュラムがあり、実践的に有効なプログラムとなっている。

③Southampton FCの育成

【The Southampton Way】

Southampton FCはサウサンプトンウェイ（The Southampton Way）というクラブの指針を持っている。これはクラブとしての自分たちの姿を示した指針であり、価値観や文化を定義したものとなっている。サウサンプトンウェイにはトップチーム、女子、アカデミーの全てが含まれている。下記が具体的な内容であり、このクラブが自らの選手育成に誇りを持ち、先取的にサッカー界をリードするクラブを目指していることが見て取れる。

このサウサンプトンウェイの中で、今回はアカデミーの指針とされているアカデミーパフォーマンスプランの研修内容について報告する。

THE SOUTHAMPTON WAY

WE PLAY THE RIGHT WAY

We uphold the true values of the game, not just on the pitch, but off it too. We are committed to supporting and improving our community

WE DEVELOP TALENT

We have an illustrious history of turning potential into excellence and a world-renowned youth academy

WE'RE FORWARD THINKING

We will be successful tomorrow as well as today. We spend our money wisely and invest sensibly in the future

WE PUSH BOUNDARIES

We lead, not follow. We constantly innovate beyond the expected in every aspect of our club and have invested heavily in state-of-the-art sports science and training facilities

WE NEVER STOP

We constantly strive to be better in everything we do. Whatever the circumstances, whatever the pressure, we never stop believing in who we are and how we do things. We never stop moving forward.

【アカデミーの目的】

Southampton FCのアカデミーは次のような明確な目的を提示している。「フィールド内外で最高の能力を発揮し、ヨーロッパの舞台で活躍できるアカデミー卒業生50%以上で構成されるトップチームを毎年作り出すこと」。この目的は具体的な数値に拘っており、誰が見ても客観的にその是非を評価することができる。2022年時点ではSouthampton FCトップチームの35%がアカデミー卒業生となっている。この数値を50%以上にするための計画がアカデミーパフォーマンスプランとなっている。またSouthampton FCではアカデミーに計3年間以上所属し、かつU-16以上のアカデミーに所属した選手のみを実質的な卒業生としてカウントしている。

【コーチングフィロソフィー】

Southampton FCのコーチングフィロソフィーには3つの大きな柱Player Centred、Holistic、Phase Specificがある。はじめのPlayer Centredとは選手中心という意味である。アカデミーではコーチが定期的に個々の選手にフィードバックを行っている。データを用いる科学的視点を持った個別フィードバックも徹底されている。また誠実なスタッフが多く、威圧的に要求を課す指導をほとんど目にしない。次にHolisticは全人的にという意味であり、コーチは選手の成長のあらゆる側面（技術的、戦術的、身体的、心理的、社会的）に積極的にサポートすることを大切にしており、またそ

れを支える環境が整っている。最後にPhase Specificは選手の成長フェーズに沿ったコーチングを意味し、コーチは特定の成長フェーズのカリキュラムに沿ったセッションを開発、提供を行う。これらの3つに共有することは、当たり前のように聞こえてしまうが目の前の選手1人ひとりを大切にしたいコーチングである。しかし、コーチ1人ひとりの懸命でかつ的確なフィードバックの精度がこのクラブの育成の真髄と言えるのではないだろうか。



アカデミーディベロップマネージャーのアンディー氏

アカデミーディベロップマネージャーであるアンディー氏は、短期的ではなく長期に渡って素晴らしい選手を輩出するために重要なのは組織の行動規範を示すことであると述べている。アカデミーの行動規範には、ピッチの内外を問わず関わる人の全てが一定の境界と期待を守ることが基本であるという考え方がある。これは全ての人が安全かつ敬意を払いながら選手の学習を促進する環境に参加することを保証するために必要とされている。行動規範はコーチ、選手、保護者、クラブ関係者、試合関係者などそれぞれに固有のものがなければならないとしている。興味深いのは、保護者に対する行動規範を明確にしていることである。

Ten Academy Commandments

1. Look smart and play smart
2. Make a connection
3. Be a good teammate
4. Take a responsibility for your action
5. Positive role model
6. On time, Never late
7. Professional approach
8. Tidy up after yourself
9. Open doors
10. Be honest, tell truth

Code of Conduct -Parents-

1. Promote high standards of behavior
2. Allow players to practice/ develop their skill by making their own decision
3. Applaud good play (Opposition and referee)
4. No shouting or screaming (Encourage)
5. No offensive or insulting or abusive language
6. Allow players to make mistakes
7. Remain outside the field of play
8. Trust the coach and respect their views

更にアカデミーはコーチが選手を様々な方法でサポートするための指導介入方法を下記の5つのコーチングスタイルとして整理している。

1) コマンドスタイル (命令型)

コーチの指示と解決策の提示「あなたにはしてほしい」
 コーチは何かをする方法を伝える、説明する、示す

2) クエスチョン&アンサー (質問と回答)

コーチが質問をして、答えを引き出す「あなたはどう思う？」
 コーチが質問を投げかけ、選手が言葉で解決策を提示する

- 3) オブザベーション&フィードバック（観察と反応）
 コーチと選手が観察「これを見てみよう」
 選手とコーチが観察し、フィードバックを話し合う
- 4) ガイディドディスカバリー（誘導された発見）
 コーチが質問したり、課題を与えたりする「見せてくれますか？」
 コーチが挑戦し、可能性のある視覚的なデモンストレーションを提供する
- 5) トライ&エラー（試行錯誤）
 選手やコーチが課題を決める「自分でやってみよう」
 選手はコーチの最小限のサポートで解決策を見つけることができる

これら5つのコーチングスタイルは、基本的に1に近い介入ほどコーチ主導の指導であることを意味し、コーチが選手に何かをする方法を指示する直接的なスタイルで情報が伝えられる。5の方向に進むにつれてコーチングの介入は選手主導になり、最小限のサポートで解決策を見つけるように促される。アカデミーは、その時の選手のニーズを満たすためにこれら5つどの介入が適切であるかを認識する重要性をコーチ陣に理解させている。

【クラブのプレースタイル】

まずプレースタイルとはクラブの目指す理想のサッカー像である。Southampton FCのプレースタイルは下記4項目を掲げている。

- I. 適切なペースと多様なパスで後方から展開する勇気を示す
- II. 意図的なポゼッションを軸にした攻撃的姿勢を示す
- III. チームとして守備し、高いインテンシティと規律性を発揮してポゼッションを奪還する
- IV. 自分の力を発揮してチームにプラスの影響を与えるような主体的な意思決定を行う個々の選手を助ける

そして、これらのプレースタイルを体現してくために、アカデミーは各カテゴリーにチームターゲットと呼ばれる6つ項目を提示している。各カテゴリーはこれら6項目についてゲームでの目標を設定し、ゲーム後のレビューを求められる。

- 1) 後方からのビルドアップ
- 2) チェンジサイド
- 3) アタッキングサードでの論理的判断
- 4) チームとしてのプレッシング
- 5) インターセプト・タックル
- 6) セットプレー

【クラブのプレー原則】

プレー原則は攻撃、守備、攻守の切り替えの4局面において目指すプレーの方向性を示している。これらは特別な戦術を示したものではなくクラブの目指すサッカーを体現するための原則であり、自分たちのプレーにのみ焦点を当てている。例えば攻撃から守備への切り替えの局面においては、ボール奪取と相手の攻撃を遅らせることを

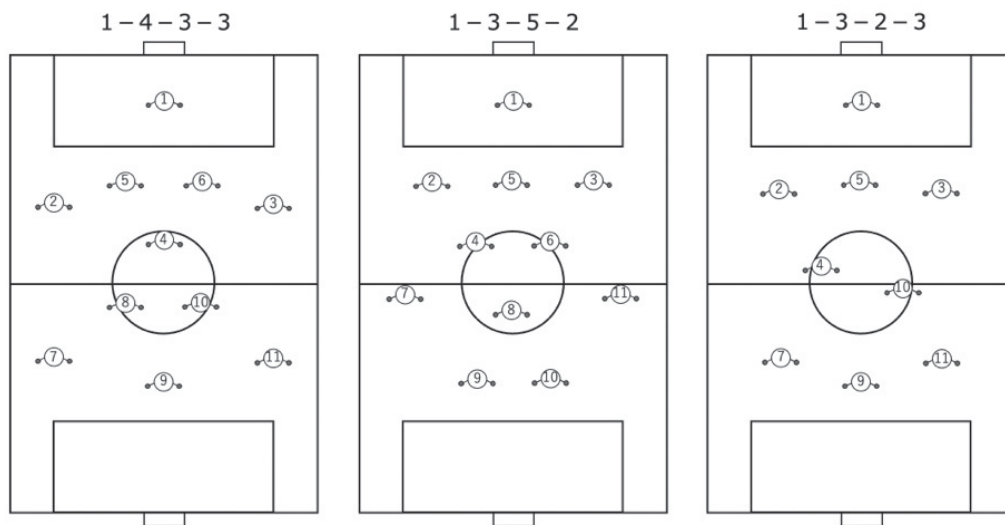
主な目的とし、それを体現するためにいくつかの細かな原則がある。ボールが相手に渡る局面には素早く反応すること、まず相手のゴール近くでボールを奪うことを試みること、チームの組織を再構成するために相手にゆっくりと進ませること、プレッシングはこれらが達成された際になされること、ボールを奪いに行くルートとスピードを最も重視すること、自分たちよりも前方にボールがあるように試みることなどの原則から構成されている。守備の局面にはプレッシャーとサポート、コントロールと規律、集中力とコンパクトさ、カバーとバランスという目的項目があり、それぞれに原則を持っている。これらのプレー原則が整理されることで、選手達やコーチ達はサッカーの局面ごとの目的やプレーが共有しやすくなり、目指すサッカーのプレーに立ち戻りやすくさせている。

【ポジション別の選手特性】

2021-2022シーズンおよび2022-2023シーズンのSouthampton FCのトップチームは主に1-4-2-3-1と1-3-5-2のシステムを活用していた。オーストリア人のラルフ・ハーゼンヒュットル監督が指揮をとっているが、1-4-2-3-1を主に選択しながら強豪相手には1-3-5-2のシステムを活用することが多かった。一方アカデミーでは、主に1-4-3-3と1-3-5-2のシステムを意図的に採用している。一見トップチームと一貫性がないように見えるが、アカデミーでは将来選手がどのような戦術にも対応できるように育成の想定がなされている。アカデミーは1-4-3-3と1-3-5-2の両方のシステムを選手に経験させることで、3ライン毎に異なる役割を理解できるようにしている。DFラインは4バックと3バック、中盤は1 MFと2 MF、1 AMFと2 AMF、前線は3 トップと2 トップのように選手は全体のストラクチャを理解した中で個人戦術、技術を鍛錬することが求められている。段階的な育成プランしてU-12までは1-4-3-3で試合を行い、U-13からは1-3-5-2を併用して試合を行う。そしてU-18に近づくにつれて選手や試合に応じてシステムを使い分ける段階へと移行させている。またU-12のカテゴリーは9人制から11人制の移行期あたり、時期に応じて両方の公式戦があるため11人制では1-4-3-3、9人制では1-3-2-3を採用している。しかし、アカデミー内では1-4-2-3-1も1-4-3-3と同じと捉える考え方もあり、実際は柔軟に選択されている。The FAもイングランド代表のシステムを年代に応じて選択しており、育成で様々なシステムを意図的に経験させる考え方が見て取れる。

図のように各システムのポジションには番号が割り当てられ、アカデミーはそのポジション別に求める選手特性を整理している。そしてそのポジション別の選手特性がU-9からU-23まで全ての選手の開発プログラムの基盤となっている。選手特性は1番から11番までの全てのポジションについて下記の5つの観点からまとめられており、Southampton FCが選手育成に最も重要視している観点となる。

- ボールマスタリー
- アスレチシズム
- ゲームインテリジェンス
- ゲームインパクト
- エンスージアズム&キュリオシティ



1-4-3-3の8番を例に挙げる。ボールマスタリーの 카테고리には、意図を隠しながら広い範囲にパスを通せること、ファーストタッチとパススピードなどが選手特性の項目に含まれている。アスレチシズムとは精神的な活動性を意味し、この 카테고리には1v1の局面における爆発的なパワーと加速、スピード持久力などが挙がる。ゲームインテリジェンスの 카테고리においてはスペースを作り出し、それを利用することでライン間やラインを越えてボールを受けられること、プレッシングにおいてゲームのリーダーシップを取れるなどがある。ゲームインパクトの 카테고리では要因を見極めて危険を察知できる、得点のチャンスメイクと点を取れるポジショニングに入れること。最後にエンスージアズム&キュリオシティがあり、これらは熱意と好奇心を意味する。この 카테고리では規律があることや、積極的な発想で受け止められることなどが項目に含まれている。アカデミーは各 카테고리でこれらの求められる選手特性から逆算した指導、評価、フィードバックがなされている。



アカデミー施設の様々な場所に選手特性のパネルがある

更にU-18以上の 카테고리にはポジション別の選手特性とは別に、選手の個別指導に用いられるプレーブックがある。プレーブックとは現在のトップチームのプレーモデルをまとめたものであり、トップチームに必要な要素から逆算して各選手に指導する際に利用されるものである。システムとポジションから各選手の比較を行い、トップチームでプレーするために必要な要素を特定しやすくなる。各選手はトレーニング後にデータの比較もできるようになっており、その中にはイングランド代表との比較も含まれる。先程紹介した選手の一人、ジェームズ・ウォード・プラウズは指定された課題をミスが無くなるまで自主練習をしていたという話がよく引き合いに出される。アンディー氏によると、U-9からトップまでの育成の階段の中でBチーム

(U-23) とトップチームのギャップが最も大きい。そのため、そのギャップを可視化して選手が把握し、取り組みやすくすることを大切にされている。

【個別トレーニング】

全てのカテゴリーで個別トレーニングの時間が設定しており、これが選手一人ひとりを成長させるための重要な要素とされている。アカデミーに所属する選手達は6週間の個別プログラムが用意されており、選手はピッチ上のパフォーマンスに焦点を当てたテーマを選択し、クラブでのトレーニング時間と自宅とでこれらのトレーニングを行う。クラブでの個別トレーニングの時間は、少数の異なるグループが設定され、全員がピッチ上で様々なトレーニングに取り組む。指導が必要な場合はコーチにアドバイスを求めるが、最終的には選手達で解決できるように促している。もちろん時には選手が自分のテーマでないトレーニングを行うケースもあるが、互いに助け合いながら目標に向かって進むことを学ばせることに役立っている。コーチは選手が自分で上達するため準備を身につけさせる意図を持って指導している。

例としてU-9からU-11のカテゴリーでは、ボールを持ってカーブしながらドリブルすることや様々なターン、そして1対1からのシュートなどに焦点が当てられている。またマルチスポーツセッションといって様々な運動パターンやスキルに触れて運動神経の発達を促す取り組みも行われる。技術面としては1対1で優位に立つ様々な方法を意識すること。戦術面としては少人数のゲーム（7対7、9対9）の中で自分の役割を意識すること。心理面では練習を楽しむ目的のある練習の価値を理解することや、チャレンジや困難に対処できる回復力を養うことがフォーカスされる。一方、U-14年代以上になるとゲームインパクトとゲームインテリジェンスに重点が置かれるようになり、選手が自分のビデオや分析を求めフィードバックを受けることを推奨している。また全てのカテゴリーのGKはフィールドプレイヤーと一緒に足のテクニックを向上させ、チーム全体への意識を高めさせようとしている。

④Southampton FCの分析

【パフォーマンス分析】

ピッチ上のトレーニングや試合に帯同しながら、選手のプレーパフォーマンスについて分析を担当するパフォーマンスアナリストがいる。日本の小学生年代、中学生年代にあたるカテゴリーにもチーム帯同のパフォーマンスアナリストがいる。クラブ全体では10または11名のプロパー契約スタッフが在籍しており、U-16以上のカテゴリーではインターンを入れながらサポートを受けている。トップチームは4名体

	Performance Analyst	Data Analyst
U-9	1staff member	3 staff members (2 proper +1 helper)
U-10		
U-11		
U-12	1staff member	
U-13		
U-14	1staff member	
U-15		
U-16	1staff + 1 helper	
U-17	1staff + 1 helper	
U-18		
U-23	1staff + 1 helper	
Top	4-5 staff members	

制を基本としておりプレマッチ分析、セットピース分析、インディビジュアル分析、休暇の4つを4名で回しながら分析を担当するシステムになっている。しかし、週2試合をこなすようなタイトなスケジュール下では休暇のスタッフがプレマッチ分析の補助に加わるようになっている。新型コロナウイルスのパンデミック後のリーグスケジュールではこの体制が長く行われていた。最近ではPlayer Pathway Analystが追加され、選手個別の成長や適正に対する分析がなされている。これらのようにパフォーマンスアナリストに対して手厚い対応がなされるのは、イギリス全体の傾向のように感じられる。イギリスでは大学院においてパフォーマンス分析が専門学問として認可されており、プレミアリーグで働くパフォーマンスアナリストの多くがこのコースから輩出される仕組みができています。そのため、パフォーマンスアナリストのインターン制度も循環しやすくなっています。

イングランドでは分析ソフトウェアにMacを用いてHudlのSportcodeを使用するのが主流である。予算を抑えたいクラブはNacsportを用いる傾向にある。Southampton FCのパフォーマンスアナリスト陣は全員がSportcodeを使用しており、統一された分析のプラットフォームがある。基本的にはHudlスタジオで加工して映像作成を行い、Hudlで映像シェアを行っている。主にアカデミーのパフォーマンスアナリストは下記の映像作成に携わる。

- 試合のチームフィードバック映像
- 試合の個別ミーティング用映像
- チームトレーニング前映像
- 次節の試合向け映像
- グループ別映像（常にではない）
- 試合前の補足映像（常にではない）

例えばU-14とU-15に帯同するパフォーマンスアナリストの週間スケジュールは下記の表のようになっており、とてもタイトなスケジュールをこなす必要がある。トレーニング中はトレーニング映像を撮影し、トレーニングすぐに映像を共有している。基本的にコーチからの要望は多くなる傾向にあるため、コーチとのディスカッションの中で分析内容の選定を行うことを大切にしている。

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
Frame the week videos						
Best practice videos	Team / Unit meetings from previous game	Can be anything depends on the need of the group	Pre-Match for upcoming game	Live analysis of situations likely to face during a game	Game alongside corrections pre-match meeting which will be stuff we've seen in training that may need altering	
Individual meetings from the game at the weekend						

更に、対戦相手の分析レポートと試合後のレポート作成が行われる。対戦相手の分析レポート内容は各パフォーマンスアナリストによって多少異なるが、主な内容は下記のようになっている。

- 4局面での相手の特徴とそれに対する自チームのプレー
- 相手のエリア別の攻守の特徴
- 相手のゴールスコアマップとゴールコネクトマップ
- 相手のゴール傾向（パターン・選手情報・時間帯）
- 過去のPKデータ

【データの活用】

アカデミーでは大量の選手に関するデータが蓄積され、活用されている。ここではいくつかのデータ活用方法を紹介する。まず、試合の数値化されるデータに関しては Stats Perform社のOpta dataの統計データを使用している。アカデミーのU-14以上のカテゴリーで1試合あたり150ポンドを費やして、全ての試合統計データを蓄積することに予算を割いている。クラブ全体で3名のデータアナリストが在籍しており、Opta dataから手にしたデータから独自の指標で分析を行ってフィードバックしている。先程述べたゲームターゲットと呼ばれる観点に基づいて統計がまとめられ、それぞれのスタッフにフィードバックされている。

フィジカルデータに関しては年に3回または4回行われるフィジカルテストと、日常のGPSデータによって観察されている。またU-16以上のカテゴリーではハートレートモニターも活用される。フィジカルテストの主な内容は以下のようになっている。

- スプリント（5/10/20/30m）
- アジリティ（5mを1往復）
- YO-YOテスト
- ジャンプ

スプリントは5mで加速、10mでどれだけトップスピードに近づけるかを見る。日本の測定距離よりも短い距離が採用されているが、おおよそ30mでトップスピードに達するためそこまでの測定を目的としている。そして、日常の運動負荷はGPSデータを指標にしている。主な指標にしているのはハイスピードの距離（5-5.5/s）、スプリントの距離（7m/s）、総走行距離、加減速である。強度をわかりやすく3段階（High/Middle/Low）に分けフィードバックしており、Acute: Chronic Workload Ratio（ACWR）の指標を用いて負荷の増減を観察している。これらGPSデータは毎日測定しており、平日の負荷を試合前に確認し、試合の負荷を試合後に確認して次の週の参考にすることが多い。

またパフォーマンス心理学者は選手のプレー学習スタイルを分析し、各選手がどのように情報を吸収、処理、保持するかを把握している。ビジュアル、聴覚、読み書き、体の感覚など選手によって得意なプレーの学習スタイルが異なるため、各選手の特徴を分析してコーチが指導に役立てられるようにサポートしている。

アカデミーはここでは挙げきれないたくさんのデータを蓄積している。これらのデータは選手の採用からポジション適正の分析、現在のパフォーマンス評価、個別ト

レーニングの根拠、進路計画などに長期的に活用されている。整備されたデータの管理システムによって、たとえスタッフが入れ替わっても一貫したデータの蓄積、比較、活用ができるようになっている。

⑤特別研修について

【The FAの女子技術委員会の取り組み】

協会のご協力をいただき、女子技術委員長のケイ氏と多くの面談をさせていただいた。ケイ氏着任当初4名であった女子技術委員会は大きな投資を期に75名のプロパーメンバーを抱えるまでになっている。そして主に選手発掘システムの構築、イングランド女子代表のプレーモデル、代表選手のサポートシステムについて改革を行っており、それらの取り組みについて教えていただいた。

育成の女子選手達は男子選手よりも多様なPathway（育成進路）があり、代表選手以外のタレントの情報を管理することは大きな課題であった。しかし、The FAは5つの地域にフルタイムコーチを担当に付け、映像データを送るシステムによって選手やクラブから選手をThe FAに推薦できる体制を構築した。そして各地域にプレーモデルを作成させ、地域の事情に応じた指導環境を整えている。またイングランド女子代表に関してはBlueprintと呼ばれる女子のプレーモデルを構築した。下記5つの内容が全ての代表カテゴリーごとに定められている。

1. イングランドチームのアイデンティティ、メンタリティ、目的、文化
2. イングランドのプレースタイルと原則を決定する代表チームの哲学
3. 選手やチームとの作業を計画、実装、レビューするための学際的なフレームワーク
4. イングランドチームをサポートするための方法
5. 選手とチームのためのタレントマネジメント

そして代表チームと選手のデータを一括で管理できるITシステムを作ることで、過去の代表チームや選手の情報が個人ではなく組織に蓄積できるようにしている。イングランド女子代表のUEFA女子EURO2022優勝、FIFA女子ワールドカップ2023準優勝を支えていたのは、これらのような長期的な取り組みの積み上げであったと理解できる。

（4）研修成果の活用計画（研修を終えて）

選手一人ひとりを本当に大切に育てるクラブの指導姿勢と分析、マネジメントを学ばせていただいた。Southampton FCの育成スタッフ、またThe FAの女子委員会の取り組みにおいても理論を体系立てることに非常に長けていると感じた。しかし、決めた体系やシステム、ルールに固執することはなく、個々のスタッフがとても柔軟に判断していた。例えばSouthampton's Wayの育成モデルにおいてゲームのシステムは本来1-4-3-3と1-3-5-2であるが、1-4-2-3-1や1-4-4-2なども育成カテゴリーの監督個別の判断によって使われる。それは育成モデルの目的を理解し、モデルに則ることだけでなく受け持った選手個々に応じた育成を目指しているためである。こうした目的と手段を混同しない柔軟な姿勢は、システムやルールの変化が早い文化の国において適応力のある人材が育まれる重要な土台になっているのかもしれない。

往々にして日本とイングランドのサッカー環境には文化的、そして経済的なギャップがあると言われる。しかし、双方の環境においてマネジメントや分析、育成方法にはメリットとデメリットがあるはずである。日本サッカー協会では三位一体のコンセプトがあり代表スタッフ、JFAコーチ、そして地域の指導者の方々との交流をしやすい環境がある。私は日本国内の指導者とのディスカッションを通してよりスポーツ文化の充実のために適した取り組みを模索していきたい。その上で、私は海外との情報共有を継続する情報戦略と機能が今後も重要になると考えている。私にできることは、この研修2年間で得た学びや人との繋がりを今後も継続して広げていくことである。

(5) その他

最後に、本研修の機会を頂いた公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本サッカー協会の関係者の方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。また、研修を快くサポートしてくださったSouthampton FC、The FAの関係者の皆様、現地で多大なご尽力をいただいたアンディー・マルティーノ氏と宮原継享氏、現地で研修を助けてくださったすべての関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

今後もこの様な研修制度により、島国の日本の指導者が海外のスポーツ文化と交流し、その繋がりを広げていけることをご祈念申し上げます。

研修員報告〈ハンドボール 嘉数 陽介〉



令和3年度・長期派遣（ハンドボール）

I. 研修題目

- ・デンマークトップリーグにおけるチームマネジメント・コーチングを学ぶ
- ・デンマークの競技力を支えるタレント育成環境について調査する

II. 研修期間

2021年10月29日～2023年10月28日

III. 研修地および日程

（1）主な研修先

デンマーク、リンコビン・オーフス
Ringkøbing Håndbold（女子トップリーグ所属）

（2）受入関係者

- ・Lars Buhl（チームリーダー）
- ・Jesper Holmris（監督）
- ・Michelle Brandstrup（ディレクター）

（3）研修日程

①通常研修

- ・2021年10月～2022年7月 Ringkøbing Håndboldクラブにて研修生として全ての活動に帯同
- ・2022年7月～2023年6月 Ringkøbing Håndboldクラブにてアシスタントコーチとして帯同

②特別研修（2021/10～2023/10）

<国内外クラブチーム視察>

- ・Santander Cup FINAL4 デンマーク
- ・Women's EHF Champions League
- ・Women's EHF European league
- ・Herreligaen（デンマーク男子トップリーグ）
- ・Men's EHF Champions League
- ・Bundesliga（ドイツ男子トップリーグ）

<ナショナルチーム国際試合視察>

- ・2022 Golden league デンマーク
- ・2023 男子世界選手権 スウェーデン

<その他>

- 2022年1月～6月
IDRÆTSHØJSKOLEN AARHUS Handball Academy/Coachコースにて座学及び指導実習
(DHFコーチライセンス代替え可能コース)
- 2022年8月～11月
IDRÆTSHØJSKOLEN AARHUS Handballコースにて外部コーチとして参加

Ⅳ. 研修概要

(1) 研修題目の細目

- ①デンマークトップリーグについて
- ②Ringkøbing Håndboldクラブについて
- ③コーチング活動について
- ④デンマークの選手育成環境について

(2) 研修方法

- ①デンマーク女子トップリーグに所属するRingkøbing Håndboldクラブの活動に研修生として全て帯同し、2021-22シーズンの視察や練習補助等を主におこなった。
- ②同クラブのアシスタントコーチとして、2022-23シーズンの試合を含めた全ての活動に帯同し、日々のコーチング活動や、選手・スタッフとのディスカッション等を通して学んだ。
- ③主な研修活動の空き時間等を利用し、世界トップレベルのクラブ、ナショナルチームの試合視察や、コーチ養成コースへの参加、また現地指導者とのディスカッション等を積極的におこない、考察を深めた。

Ⅴ. 研修報告

(1) デンマーク女子トップリーグについて

①概要

デンマークでは、トップリーグのKVINDELIGAEN、その下部にあたる1. DIVISION KVINDERの2つがプロリーグ規定の中で運営されており、その下部には2. DIVISION、3. DIVISION～以下が存在する。全てのリーグで毎年順位による昇降格があるため、財務条件等をクリアすれば実力次第でリーグへ昇格することも可能な仕組みとなっている。

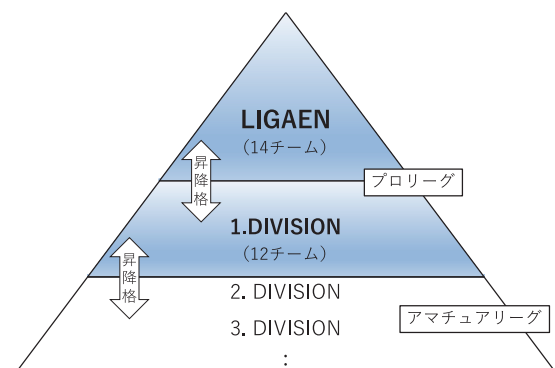


図 デンマーク女子リーグ概要

②リーグの環境と試合数

デンマーク女子トップリーグの全体的なレベルは、上位だけでなく下位までのレベ

ルを鑑みると、世界トップ水準である。平均的にレベルが高くなる理由は、デンマークシニア代表選手やユース、ジュニア代表出身のタレントが国内リーグに数多く在籍していることに加え、ノルウェー、スウェーデン、オランダなど、北欧諸国や隣国からメダル常連国の代表選手が数多く在籍しているからである。そのためリーグ上位チームだけでなく、中位・下位チームのレベルも非常に高く、若いタレントが下位チームでトップリーグキャリアをスタートさせて、経験と実績を積んで上位チームに移籍する強化循環も起こりやすい環境となっている。



毎試合、非常に高い負荷がかかる

また、数多くの各国代表選手が在籍するトップチームは、中位、下位チームに比べて試合数が非常に多く過密スケジュールとなる。リーグ上位2チームは欧州ハンドボール連盟主催のチャンピオンズリーグ（EHF CL）出場権を獲得し、3、4位はヨーロッパアンリーグ（EHF EL）への出場権を獲得する。加えて、国内カップ戦（Santander Cup）でもFINAL4まで勝ち残ることを考慮すると、上位4チームは通常のリーグ戦に加えて、10試合～最大25試合程度増えることになる。

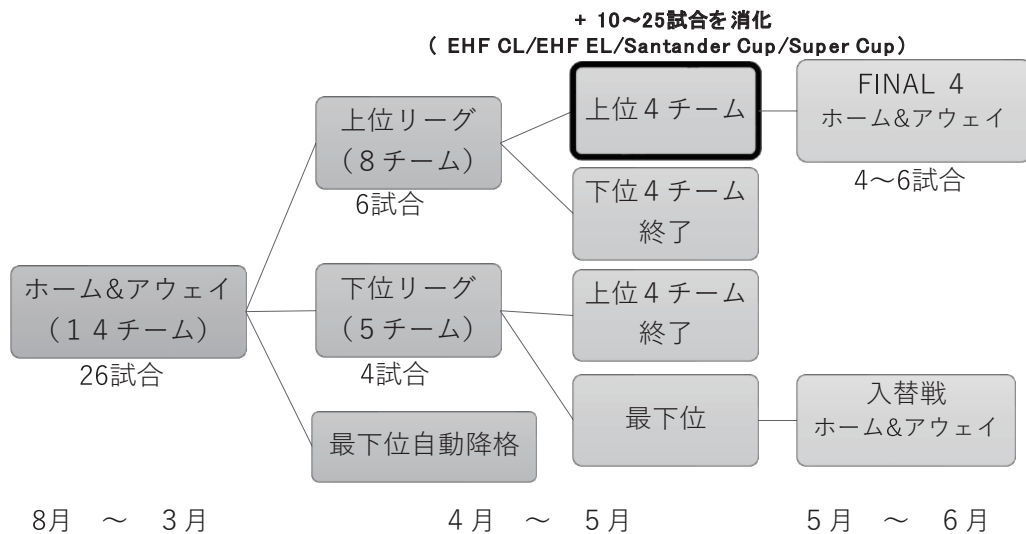


図 LIGAEN女子のスケジュールと試合数

さらに、トップチームのほとんどの選手は国の代表でもあるため、ナショナルチーム活動期間は合宿や大会等で強度の高い活動が続く。これにより、選手・スタッフは世界トップレベルの環境で日常のように試合経験を積むことができる。ただしトップチームの選手にかかる心身の負荷は極めて高く、怪我への耐性も含めてタフな選手でなければ生き残ることが困難な世界であった。



国内カップ戦のFINAL4



HC Odenseのホームにて行われたEHF CLグループリーグの試合

③移籍市場とプレー環境の社会的背景について

上述したように、デンマークリーグでは若いタレントが下位チームで経験と実績を積み、上位クラブへ引き抜かれてゆく強化環境が整っている。その背景として、2つの要因が考えられる。1つめは、選手・スタッフのクラブ間移籍による流動性が高いことである。デンマークには複数のエージェント会社が存在し、複数クラブから声のかかるようなタレント選手はエージェントと契約をして、各クラブと条件面を整理・交渉しながらプロ契約を結ぶ。エージェント会社や個人エージェントの活動に関しては、欧州各国でクラブや監督、GM、選手とのネットワークが広がっており、筆者がコーチとして関わるクラブ内でも様々な選手の契約交渉や複雑なプロセスで起こる問題を目の当たりにした。強化環境としてメリットがある反面、プロ契約選手の厳しさやリスクも大きくなるため、マネジメント能力が必要になる。

2つめは、若いタレントが学業とプロ選手のデュアルキャリアを歩みやすい環境が挙げられる。これは社会背景が大きく関係しており、デンマークの国民は大学に進学すると国から約10万円ほどのお金を国から受給できる。また、大学にスポーツ推薦等は存在せず、大学単位でハンドボールクラブもないため、ライフプランを持ってセカンドキャリアを考えながらプレーする若いタレントが、プロ選手として下位チームでプレーしながら大学に通うデュアルキャリアを歩みやすい環境が整っている。これらの学生選手が、トップリーグスケジュールとテスト期間の重複などにより単位履修に問題が起こった場合の仲裁や、事前に大学側に対してテスト期間に関する特別措置の要望などを担ってくれる団体も存在する。この団体は、リーグ所属各チームからの協力金を資金源として数名で運営されている。

以上2つの点が起因して、トップリーグで良い循環が起こりやすく、強化環境が整っていると考えられる。

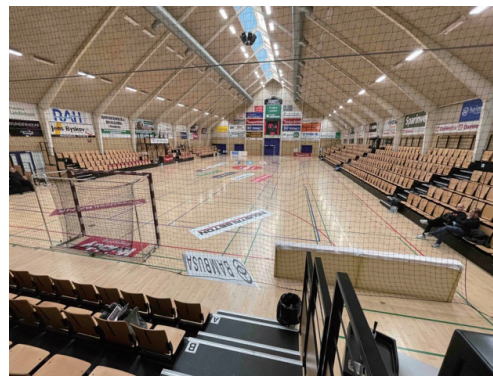
④映像分析システムについて

筆者がアシスタントコーチとして活動をする中で、選手への試合映像フィードバックや相手の分析には、「XPS SIDELINE」という分析ツールのクラブアカウントを使用した。このソフトは全チームにそれぞれアカウントが配布されており、リーグおよび各クラブが契約を交わし、アカウント数やサービス内容に見合った契約金をそれぞれ

れのクラブが支払って活用している。XPS社の役割としては、各クラブから共有サーバーにアップロードされたフルマッチの試合映像に、プレーのタグ（プレー内容、時間情報）を打ち込むことである。これにより、クラブは各自アカウントからその情報へアクセスすることで、映像のダウンロード、シーン別での切り貼りなど編集作業が簡単におこなえて、分析作業やミーティング資料に活用できる仕組みとなっている。XPS社は日本の代表チームやリーグにおいても導入実績があり、国内での認知度や活用例も広まりつつある。

（2）Ringkøbing HåndboldクラブとJesper Holmris監督について

主な研修先としたRingkøbing Håndboldクラブは、デンマーク西部ユトランド半島の更に西海岸にある小さな街Ringkøbingにホームアリーナを持ち、過去には長い間リーグと1. DIVISIONで昇降格を繰り返してきたクラブである。2019年にJesper Holmris監督を招聘してから2020-21リーグ再昇格を果たし、2021-22 13位/14、2022-23 10位/14と、昇格から順調に成績を上げている。



西海岸の小さな街にあるホームアリーナ

2023-24シーズンでは新たに8名の新戦力を迎え、2023年11月現在11試合を終えた段階で既に昨シーズン格上であった3チームに勝利し、8位につけている。

現在チームを率いているJesper Holmris監督は、元デンマーク代表選手であり、国内外のリーグでプレー経験がある。指導者としては、国内女子トップリーグで複数チームを渡り歩いたほか、スイスリーグ、スイス代表監督、中国代表監督、イングランド代表監督（ロンドン五輪時）も歴任しており、選手、指導者の両方で国際的に活躍をしてきた人物である。現在のデンマーク女子代表登録選手には、Jesper監督のクラブで若い時にプレーした選手が4名おり、若い選手の育成に定評がある。研修時の2021～23シーズン、クラブは下位群に属していたため、上述したような国内リーグの強化循環において、このクラブは若いタレント育成の役割を果たしていた。実際に今シーズンは上位群のチームへ2名の若い選手が移籍した。

筆者がアシスタントコーチとして活動した2022-23シーズンの選手構成は、アイスランド代表GK、コソボ代表2名、デンマークユース代表出身者3名、その他スウェーデン、オランダ、デンマーク国籍選手が在籍していた。主なスタッフは、チームリーダー、ディレクター、監督が常勤で活動しており、アシスタントコーチ、GKコーチ、トレーナー、ビデオ撮影担当、クラブ運営スタッフが、それぞれパートタイムで他にも仕事をしながらクラブの活動と掛け持ちをしていた。

また、ホーム戦や各イベントの際には、毎回多くのボランティアスタッフが試合運営を手伝っており、これは他クラブでも同様に見られた。



Ringkøbing Håndbold 2022-23シーズン



Jesper Holmris監督

(3) コーチング活動について

① チームマネジメント

1) 目標設定

シーズンスタートの際に、監督はキックオフミーティングの中で、簡単なスタッツを共有しながら昨シーズンの総評と今シーズンの目標を提示した。具体的な結果目標として10位に入ることを掲げ、それに伴って「リーグ内での地位を確立する」、「格上に対する接戦の勝率を上げる」ことなどが示された。また、目標設定の背景としてスタッツからの分析を示し、各ポジション、スキル別のパフォーマンスでどこの数値を改善すべきかをプレゼンしていた。「10位」という設定は、当時はまだ達成したことがなく、現実的な数字でもあった。この根拠について、まず全チームのグルーピングがな

表 シーズン開始前の目標設定と実際の結果

RANK	シーズン前ターゲット	終了時の順位
1	Esbjerg	Odense
2	Odense	Esbjerg
3	Herning Ikast	Herning Ikast
4	NFH Nykøbing	NFH Nykøbing
5	Viborg	Viborg
6	Silkeborg	Copenhagen
7	Horsens	Silkeborg
8	Copenhagen	Aarhus
9	Aarhus	Horsens
10	Ringkøbing	Ringkøbing
11	Randers	Sonderjyske
12	Sonderjyske	Skanderborg
13	Skanderborg	Ajax
14	Ajax	Randers…財政破綻で棄権

された。レベルが抜き出ている上位3チームをA Group、変動の激しい中位6チームをB Group、自チーム含む下位5チームをC Groupと設定し、下位グループの中では最上位の地位を確立することをシーズンの目標とした。また、スタッフ・役員内においては、更に2～3年後には中位グループへと押し上げることが中・長期的なターゲットとして話し合われていた。

シーズン終了時と比較すると、目標のクラブ最高成績を達成しただけでなく、グルーピングも監督の分析通りの結果であったため、非常に妥当性が高い現状分析と目標設定であったと言える。また、2023年11月現在、クラブはリーグ中位グループの8位につけており、戦略通りのクラブ強化が推進されていると推察できる。

2) スタッフの役割分担

各スタッフの役割分担については以下の表の通りであった。筆者はアシスタント

表 スタッフの役割分担

役職	役割	契約形態
チームリーダー	全体経営の責任者。選手スタッフの人事権。リーグの非常勤理事としても活躍。	常勤
マネージャー	全イベントスケジュールやアイテム等の予算を管理。広報・マーケティングも兼任。	常勤
監督	チームマネジメント責任者。チームリーダーと連携しながらスケジュール管理や選手との契約交渉も行う。	常勤/ 3年毎更新
アシスタントコーチ (筆者が担当)	監督のチームマネジメント補助。試合に向けての分析活動や選手へのコーチング。	常勤/非常勤
トレーナー メディカル/ストレングス	メディカル/ストレングスの責任者。全試合に帯同。トレーニング前後の治療活動は所属会社と調整し都度対応。	非常勤/複数名体制
ビデオ撮影担当	ビデオの撮影とリーグ共有サーバーへのアップロード、選手・スタッフとの映像共有など。	非常勤
クラブ運営スタッフ	クラブ運営庶務の手伝い。	非常勤
ボランティアスタッフ	ホームゲームの開催運営、クラブイベントの運営補助など。	



W-UPトレーニングの様子



快く受入れて頂いたチームリーダー

コーチとしてトレーニング補助に入ったほか、部分的に練習を担当したり、担当ポジションを監督と分担して反対コートでトレーニングを同時進行することも多くあった。試合の準備には、監督の必要とする映像編集や分析を補助し、試合後は監督と協議して、ピックアップした選手に対する個別の映像フィードバックをおこなった。

3) リーダーシップとオーナーシップ

Jesper監督の2年間のチームマネジメントから、リーダーシップについての考え方を様々な視点から捉えることができた。筆者が実際に見た中で最も感じたのは、チーム全体に根付いているオーナーシップであった。オーナーシップとは、一般的に主体性を持って自発的にタスクに取り組む姿勢やマインドのことを指すが、チー

ムに関わった初日のミーティングからそれを強く感じた。監督から戦術や戦略について教示するだけのミーティングはほとんど見られず、必ず監督が話している途中や終わりには、選手から監督へ、あるいは選手同士で意見を交換し活発な議論が交わされた。これは試合での起用が少ない選手やリハビリ中の選手でも関係なく起こっていたため、それぞれオーナーシップが備わっていると強く感じた。さらに、チームのキャプテンは決まっていたが、教えてもらうまで誰がそうなのかを練習だけで見極めることは難しかった。それほど各選手の主体性が高い文化があり、一人一人の自律が促される環境になっていた。

4) オープンマインド

オーナーシップが当たり前になる背景として、国柄も関係していることは考えられるが、監督が非常にオープンマインドであることが挙げられる。監督との会話は常に開かれた状態であり、トレーニングや試合の前後であっても、必ず選手から個別に話があれば耳を傾けていた。それはトレーニング後の談笑からシリアスな意見や要望であっても一貫しており、なおかつ選手に対して正直に思うことや考えを伝えていた。筆者が見てきた限りでは、議論から逃げてその場凌ぎの為に欺いたり、閉鎖的になることはなかった。

②コミュニケーション能力の重要性

コーチング活動をする中で最も必須なスキルと感じたのは、コミュニケーション能力である。デンマークは国柄として人権や平等に注力してきた高度福祉国家である背景もあり、選手は年齢や立場に関係なく平等にコミュニケーションをとる。映像フィードバックの際やコートでコーチングをする際には、意図が伝わっていなければ選手からすぐに質問があり、納得いかなければ意見をするのが当たり前であった。感心したのは、練習の設定にまで要望することや、チームのどこに課題があるからこの練習をするのか、監督と選手が議論することも茶飯事であった。この環境でのコーチングは、最初こそ戸惑うものの、慣れてくるとお互いに意見をぶつけ合うことでベストな着地点を探り、こちらが納得した選手の意見はそのまま取り入れたりすることで、チーム全体の協働作業でチームづくりをしている感覚があった。ただし、当然ながらコーチも全ての行動に哲学と明確な理由を持ち、熱意と併せて伝えるスキル（言語/非言語）を備えなければ、この環境で指導者としてリーダーシップを発揮するのは困難であると感じた。

③トレーニング期分け

1) オンシーズン

シーズン期間中の1週間のスケジュール例を以下の表に示す。

試合の多い期間は2試合/週が組まれており、水曜と土曜あるいは水曜と日曜でこなすことが多かった。デンマークは小国のため、最も遠いアウェー戦でもバスで4時間以内程度の移動で済み、ブンデスリーガなどに比べると移動の負担は少ない。各試合に向けた映像分析やミーティングを行い、ボールトレーニングはコン

表 シーズン中のスケジュール例

曜日	時間	全体の活動	コーチ陣の活動（主担当・副担当）
月曜	15：30－16：00 16：15－18：00	映像ミーティング（相手の分析） ボールTR（高強度）	<ul style="list-style-type: none"> 相手の分析/ミーティング資料作成/プレゼン 先週のゲームの個人フィードバック トレーニングのマネジメント
火曜	15：30－15：50 16：00－17：30	映像ミーティング（対策） ボールTR（低～中強度）	<ul style="list-style-type: none"> 映像資料作成/プレゼン トレーニングのマネジメント
水曜	17：00－17：15 18：00－19：30 (移動片道2時間)	戦術確認ミーティング 公式戦 vs Esbjerg	<ul style="list-style-type: none"> W-UP開始15分前から戦術確認ミーティング ゲームマネジメント 試合後の全体ミーティング/スタッフ意見交換
木曜		ウエイトTR (個別メニュー)	<ul style="list-style-type: none"> 試合分析/ミーティング資料作成 トレーニング考案 選手のコンディション確認連絡
金曜	15：15－15：45 16：00－17：30	映像ミーティング（相手の分析） ボールTR（中強度）	<ul style="list-style-type: none"> 相手・自チームの分析プレゼン 個人/グループのパフォーマンス映像フィードバック トレーニングのマネジメント
土曜	17：00－17：15 18：00－19：00 (移動片道2時間)	戦術確認ミーティング 公式戦 vs Randers	<ul style="list-style-type: none"> W-UP開始15分前から戦術確認ミーティング ゲームマネジメント 試合後の全体ミーティング/スタッフ意見交換
日曜		REST	<ul style="list-style-type: none"> 次節の対戦相手・自チーム分析/ミーティング資料作成 トレーニング考案 選手のコンディション確認連絡

ディションを最優先しながらコントロールしていた。監督が練習を組む中で、コンディショニング不良や小さな怪我を抱えた複数名の選手の状態を把握し、個別に練習量をコントロールする必要があったため、人数によってトレーニングメニューにも大きく影響し、苦慮していた。その中で筆者は、練習の中で足りないポジションに入ったり、分析作業を手分けしたりと、手の届かないところをなるべくフォローしてスムーズに流れるようアシスタントに努めた。シーズン中のトレーニングにおいて、コンディショニング事情による選手のイン・アウトが激しくなると、出場機会の少ない選手にとって強度や質が大きく低下するため、近くのクラブチーム監督やスタッフと連絡を取り合い、若くてリーグを目指すタレントをトレーニングに招き、お互いにとって良い条件で実践トレーニング環境の整備に努めていた。

2) オフシーズン

休息の日数がルールにより定められているデンマークでは、7月に20日間ほどのまとまったホリデー期間がある。休息によるメンタル面やライフバランスなどの好影響はあるものの、活動再開に合わせて体力を維持することもプロ選手として義務であり、新シーズンの活動スタート時には持久系の測定も組み込まれていた。この期間の体力維持を促すため、クラブではトレーニングプログラムを作成し、共有・推奨していた。内容はスピード、間欠的持久力のメニューが多く、走れる場所とランニングシューズがあればこなせる内容が示されていた。

Program		
1	Grundig opvarmning 6 x 2 min med 1 min pause / 3 min pause / 4 x 2 min med 45 sek pause Nedvarmning + udstræk	80-90%
2	Grundig opvarmning 10 x 1 min med 30 sek pause / 3 min pause / 5 x 1 min med 15-20 sek pause Nedvarmning + udstræk	80-90%
3	Grundig opvarmning 8 x (6 x 30sek/30sek) / 2-3 min pause mellem hvert sæt Nedvarmning + udstræk	100 %
4	Grundig opvarmning 200 meter 200 meter 200 meter 2 x 30 meter 2 x 30 meter 2 x 30 meter 2 x 30 meter 400 meter 400 meter 800 meter Nedvarmning + udstræk	Start-tid 0 min. 2,30 min. 5 min. 8 min. 9,30 min. 11 min. 12,30 min. 14 min. 17 min. 21 min. 25 min. 100 %
5	Grundig opvarmning 4 x 100 meter med 25 sek. pause 5 min pause 6 x 60 meter med 15 sek. pause 5 min pause 8 x 40 meter med 10 sek. pause Nedvarmning + udstræk	100 % 100 % 100 %
6	Grundig opvarmning 6 x (50 meter / 30 sek pause / 200 meter / 2,45 pause) Nedvarmning + udstræk	100 %
7	Grundig opvarmning 5-10-15 meter løb med vendinger 1 runde er at løbe fra start position 5 meter frem og tilbage til start, frem til 10 og tilbage til start samt frem til 15 og tilbage tilbage til start. Det er 1 runde! Gør det i en pyramide: 1,2,3,4,5,6,5,4,3,2,1 Altså løb 1 runde, hold pause, løb 2 runder, hold pause, løb 3 runder, hold pause osv... Nedvarmning + udstræk	

オフシーズンの体力維持プログラム

Ringkøbing Håndbold Juni - Juli 2022				
Dato	Sted	Tid	Træning	Bemærkning
Mandag 27. Juni			Løb	Program 1
Tirsdag 28. Juni			Styrke	Se træningsprogram
Onsdag 29. Juni				
Torsdag 30. Juni			Løb	Program 2
Fretdag 1. Juli			Styrke	Se træningsprogram
Lørdag 2. Juli			Løb	Program 7
Søndag 3. Juli				
Mandag 4. Juli			Løb	Program 3
Tirsdag 5. Juli			Styrke	Se træningsprogram
Onsdag 6. Juli				
Torsdag 7. Juli			Løb	Program 4
Fretdag 8. Juli			Styrke	Se træningsprogram
Lørdag 9. Juli			Løb	Program 7
Søndag 10. Juli				
Mandag 11. Juli			Løb	Program 5
Tirsdag 12. Juli			Styrke	Se træningsprogram
Onsdag 13. Juli				
Torsdag 14. Juli			Løb	Program 6
Fretdag 15. Juli			Styrke	Se træningsprogram
Lørdag 16. Juli			Løb	Program 7
Søndag 17. Juli				
Mandag 18. Juli	ROFI	15.30-18.00	Opstartsmøde + Håndbold	
Tirsdag 19. Juli	ROFI	16.00-20.00	Håndbold + besøg af Mizuno	
Onsdag 20. Juli	Isst	15.30-17.30	Fysisk træning	
Torsdag 21. Juli	Vorgod Barde Hallen	15.00-17.00	Håndbold	
Fretdag 22. Juli	ROFI	15.00-17.30	Håndbold	
Lørdag 23. Juli			Fysisk individuelt	
Søndag 24. Juli				
Mandag 25. Juli	Isst?	15.00-17.00	Håndbold	Fysisk test
Tirsdag 26. Juli	ROFI	16.00-18.00	Håndbold	
Onsdag 27. Juli			Fysisk individuelt	
Torsdag 28. Juli	Vorgod Barde Hallen	15.00-17.00	Håndbold	
Fretdag 29. Juli	Jysk Arena, Silkeborg	14.45-17.30	Træningskamp mod Silkeborg 15.30	
Lørdag 30. Juli			Fysisk individuelt	
Søndag 31. Juli				

オフシーズンの推奨スケジュール



戦術ミーティングの様子



戦術ミーティングの様子

④戦術ミーティング

各試合の前後および当日に行う戦術ミーティングは、主に次の内容であった。

1) 試合に向けた準備

<試合3日前～前日/後日>

- ・チーム/グループ戦術、Key Player、ゲームコンダクトに関する傾向
- ・自チームの振返りと次戦の狙い
 - －前節のパフォーマンス評価、次戦に向けた戦い方
- ・個別のパフォーマンス評価と改善に向けたフィードバック



試合直前のロッカールーム



ホーム戦の入場セレモニー



試合中のベンチ



試合中のタイムアウト

2) 試合当日のミーティング

- W-UP前：戦い方の最終確認（15分程度）
 - －要点の戦術最終確認
- 試合直前：ペップトーク
 - －スターティングメンバーの確認、チーム鼓舞、円陣でお互いに奮い立たす

⑤ゲームマネジメント

試合中における選手交代や戦術決定などの采配は全て監督が行っていた。筆者はアシスタントコーチとして選手へのコーチングに加えて、監督から「感じたことなどの情報は全て伝えて欲しい」という要望があったため、チームが準備してきた戦術やゲームの状況などを考慮して、戦術や選手交代に関する意見と、チームの各局面パフォーマンスの評価について都度監督と情報交換、会話をを行った。監督からは常にコート内外で質問や意見が飛び交っており、選手とコーチ、選手同士でも意見をぶつけ合う状況が常に見られた。監督は全ての采配を行う中で、コート内の感覚を大事にしながら戦術決定をしているように感じられた。試合状況のめまぐるしい変化に対し、コミュニケーションを密に取ることで対処していくような感覚であった。

タイムアウトを申請する際は主に、ゲームの悪い流れを止める、戦術・選手の大幅な変更、少ない残り時間の戦い方の確認等、いずれかの目的で申請することが多く、ほとんどの場合、「今何が起きているか」、「対処するために次何をすべきか」が簡潔に伝えられ、選手同士も意見をぶつけ合いながらインタラクティブに行われていた。



スポンサーイベント食事会場



ウェ이터としてイベントの運営をする選手



イベント中の様子

⑥地域貢献活動とスポンサーイベント

全ての活動に帯同する中で、イベント運営ではいくつかの興味深いアイデアも見られた。スポンサーと協力して開催されたイベントでは、選手がモデルとなってステージに上がり、町の婦人服ブランドをPRしたり、食事会で事前にゲスト参加するスポンサー様から贈呈された商品をオークションとして出展し、参加者同士で落札された分の資金をクラブ活動費に充てたりと、さまざまなアイデアによるイベントが開催されていた。終始和やかな雰囲気でも盛り上がり、小さな町のクラブに対する、スポンサー企業による温かい支援、声援を肌で感じる機会となった。また、Ringkøbing Håndboldクラブは、スポンサー同士のコミュニティを重要視しているクラブであると感じた。

(4) デンマークの選手育成環境について

①従来のタレント育成システムと、新たな育成システム

デンマークが小国でありながら男女とも世界のトップゾーンに上り詰めている理由として、高度なタレント育成システムが挙げられる。従来よりデンマークハンドボール協会（DHF）は、国策としてのサポート背景もあり、タレント発掘・育成システムに力を入れてきた。DHFタレント発掘・育成は14～15歳を対象に始まり、まず全国各地で月に1～2回程度集めてタレント育成を行ってきた。さらに各大会でのパフォーマンス評価も加味し、それぞれの地区が所属する地域の選抜として有望選手を選考した後、16～17歳の段階でDHFが管轄する全国タレントトレーニングに参加するという流れであった。その後有望な選手達は全国タレントトレーニングを経て、U18/19代表に選考され、強化選手として国際大会に出場し、将来の代表選手が強化されてゆく仕組みである。このタレント発掘・育成から強化につなげる大まかな枠組みは、近年の男女の好成績の一要因として評価されてきており、昨年まで事業内容に多少の変化はあっても、大きな枠組みや狙いは同じであったと思われる。その裏付けとして、男子のタレント育成責任者は数年前まで約16年近くにわたって同一人物が務めていたという背景もある。彼の功績は近年の男子Aナショナルの好成績において非常に大きい。

しかし、2023年DHFは協会全体として新たな人材戦略を打ち出し、これに合わせる形で発掘・育成事業も方向性を見直しと新たな具体的方向性の発表がされた。育成大国との呼び声高いデンマークが、ナショナルチームで好成績を残しているこのタイ

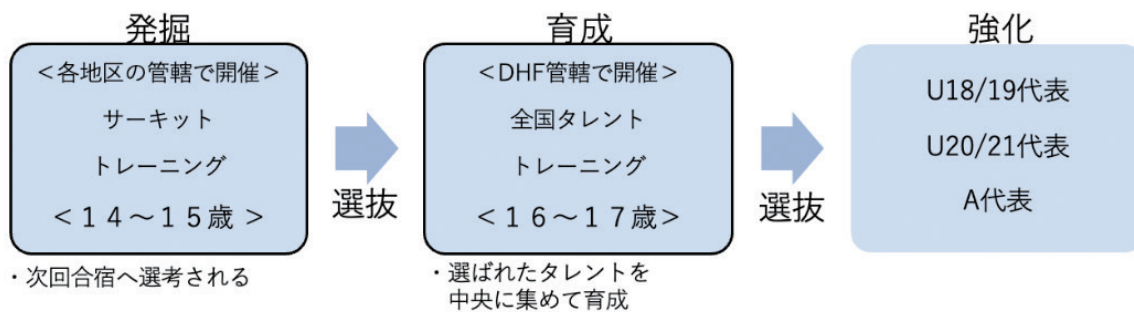


図 従来のタレント育成の流れ

	クラブ・地域環境	DHFタレント			U代表チーム
17歳 16歳	クラブ アフタースクール /アカデミー 早朝練習、スポーツ教室 地域の取り組み	地域 タレント トレーニング	全国 コレクション 1・2エリア 3日間	全国 コレクション 1エリア 5日間	男子18/19 女子17/18
15歳 14歳	クラブ アフタースクール 早朝練習、スポーツ教室 地域の取り組み ※身近な環境での能力向上	地域 タレント トレーニング 地域 タレント トレーニング			
13歳 12歳	クラブ 早朝練習、スポーツ教室 地域の取り組み ※身近な環境での能力向上				

図 新しいタレント育成のイメージ（DHF資料の情報を参考に作成）

ミングでタレント育成の方向性を見直したことに筆者は驚いた。独自にクラブの監督や友人コーチを尋ね、「若いタレント選手の競技離れ」が一つの問題として認識されていることも示唆された。

最も中心的な変更部分は、以下の点である。

- ・人材育成がより構造化され、育成の場を分散化して実行する
- ・各地域トレーニングの狙いを、「選考」よりも「能力開発」に重点を置く
- ・事業内容を多様化させ、選考基準も多様化させる（様々なポジション/体格/生まれ月など）

これらの背景として最も大きな概念の変化は、タレント育成事業において「能力開発」に最も重きを置くという部分である。従来のシステムでは各地区で多くのタレントを集めてトレーニングを行い、各クラブや地区タレントコーチによる選考が目的となっており、その後各地域の選ばれた選手を集めて16～17歳を対象にDHFタレントコーチが直接的にタレントトレーニングを実施していた。しかし、新しいシステムでは、17歳のタレントトレーニングにおいても担当者を任命して一部地域に移行するため、16～17歳のタレントも地域が育成トレーニングを継続する形となり、育成の

場がより構造化・分散化されることになる。これにより、14～15歳を対象とした地区トレーニングでは、「選考」よりも「能力開発」に向けた事業を展開しやすくなる。さらに、タレント育成事業の内容を多様化させたことにより、形態的に劣る選手、より多くのポジションの選手、早生まれなどで選ばれにくかった選手などが育成の網から漏れにくい仕組みになっている。

これらの施策により、タレントコーチが今まで以上に選手の成長を目的として関わることで、より多くのタレントがモチベーション維持できることに加え、事業を分散化させDHF-各地域のコミュニティをさらに広く強固なものにしていくことで、未来の有望なタレントを1人でも多く、かつ長く、競技者として活躍させることが期待される効果として挙げられている。

従来のシステムから新しいタレント育成システムへと大きく変化させるにあたり、DHFは新しい人材戦略について、そのビジョンや価値観を公式ホームページにて公開している。タレント育成において掲げているビジョン、ミッションは、次の通りである。



また、ビジョン実現に向け、①熱意、②能力開発、③コミュニティ、④信頼性の、4つを重要な価値観として挙げ、それぞれ大切にしている考え方が説明されている。(下図参照)

従来の育成システムを通して近年男女のナショナルチームで世界トップゾーンの地位を確立してきたデンマークが、新たな人材育成戦略を掲げ、事業の狙いを大きく変

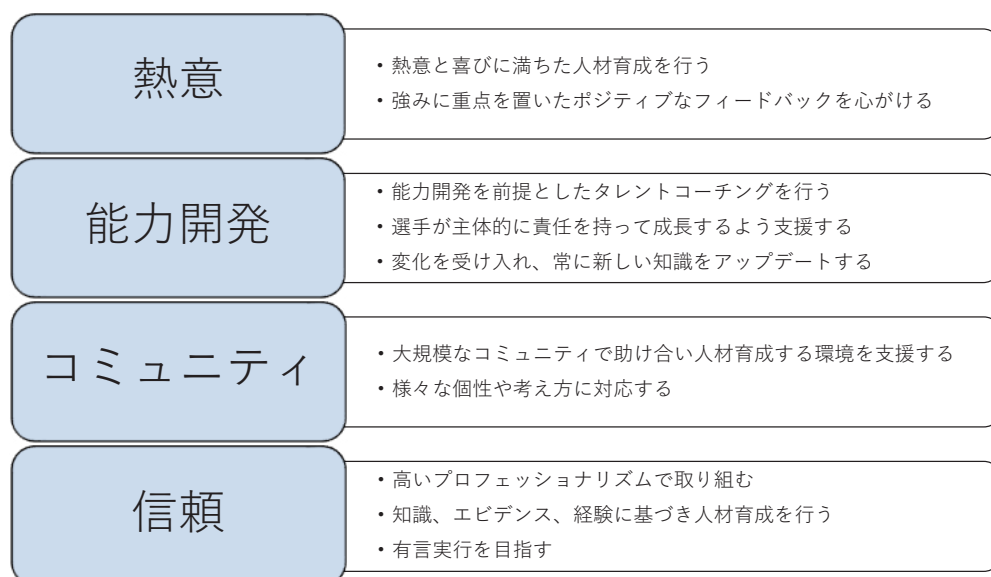


図 新しいタレント育成の4つの価値観（DHF資料の情報を参考に作成）

更してブラッシュアップしたことは、リスクや逆風よりも成長を追い求めた姿勢の表れであると感じた。また、ナショナルチームが良い結果を出していても、若いタレント世代の現状に危機感を抱き、未来のためにいち早く行動を起こしているとも言える。リソースの少ない中で無駄なく多くのタレントを発掘・育成する戦略は、日本でアスリートパスウェイを構築する際にも参考になる部分が多いと考えられる。

Ⅵ. 研修成果の活用計画

帰国後は、日本ハンドボール協会の強化スタッフとして勤務し、発掘・育成・強化の事業に専任として広く関わることが決まっている。今回2年間の海外研修で得られた貴重な経験に加え、女子代表スタッフとして東京五輪を含む強化事業に関わった6年間の経験を活かすことで、日本のハンドボール界へさらなる貢献ができるよう尽力したい。

具体的には、日本ハンドボール協会において主に以下の3つに関して、重点的に還元してゆくことを計画している。

（1）タレント発掘・育成事業への貢献

日本におけるタレントの発掘・育成は、部活動などの教育機関や社会背景も鑑みて独自の文化を考慮すると、欧州強豪国のモデルをそのまま転用することは不可能である。しかし、コーチング哲学、プレー環境、関係者とのコミュニケーションなど、指導者が参考にできる点が多い。今後コーチとして日本のタレント育成に関わってゆく中で、広い視野で有望な選手の可能性を開花させられるようなコーチングと環境整備を実践してゆきたい。

（2）強化事業への貢献

日本代表が競技力でアジアトップの実力をつけ、オリンピック常連国、世界でベスト4へチャレンジできる土俵に上げられるよう、自らも勉強を続けながら選手強化に関わってゆきたい。今年は女子がアジア大会を制し、男子がオリンピックアジア予選で優勝して切符を獲得するなど、他競技同様に大きく成果が表れた年と言える。今後も持続的に五輪に出場し次のステージへ上がるよう、若い世代を中心に国際経験、選手強化に貢献したい。

（3）アスリート育成パスウェイ構築への貢献

帰国後より発掘・育成・強化活動に広く関わる予定のため、若いタレント世代から強化選手に至るまで、一貫通貫した選手の育成・強化活動が可能なことに加え、選手の各段階に長期的視点をもって関わるができる。その環境を十分に活用し、アスリート育成の包括的で現実的なパスウェイ構築に貢献してゆきたい。

Ⅶ. その他

（1）エリートスポーツの文化・国策としての背景

2年間にわたり、ハンドボール発祥の地であり国技と言われるほど競技が発展しているデンマークで経験を積むことができたことは、人生において大変貴重な経験と

なった。人口も面積も小さな国にも関わらず、デンマークは、世界大会においてハンドボール、バドミントン、サイクリングなど様々な競技のエリートレベルで良い成績をおさめている。当然ながらハンドボールが発展した背景には、競技団体の努力だけではなく、国の文化や政策も大きく関わっていると感じた。国民の人権や平等を重要視する高度な福祉国家であるデンマークでは、エリートスポーツ政策において、アスリートが等しく同じ教育を受けられ、充実した生活やセカンドキャリアを歩めるよう方針が定められている。そうでなければ、エリート選手の人権を守る観点から、社会全体から認められないからである。さらに各競技団体に支援される助成金のうち、タレント育成に使用すべき割合が定められていたり、メダル獲得競技だけでなくその他の多くの競技に支援が行き渡りやすい構造になっていたり、「スポーツ」が、豊かな人生のために必要不可欠なものとして当たり前前に生活に存在する「文化」が根付いているように感じた。加えて、統括する団体と地方とのネットワークを構築し、地域が拠点となって事業を分散化、協働しやすい仕組みになっており、コーチ同士、関係者同士のコミュニケーションを重要視している点も、参考にすべき点であると感じた。

今後、競技団体の様々な事業に関わってゆく中で、競技力向上の価値を新たな視点から考え直し、なぜ我々が指導者として競技の発展を目指すのか、改めて哲学する良いきっかけとなった。この2年間で得た視点を大切にして、多様化する社会でも持続的に良い人材を育て続けられる仕組みづくりに貢献したいと考えている。さらに、日本ハンドボール界が益々の発展を遂げることで、関わる人々の人生を豊かにしたり、誇りに思えるような競技になることを目指して、自分にできる目の前のことを精一杯取り組みたい。

(2) 謝辞

最後になりましたが、研修をするにあたり、快く受入れて頂いただけでなく、アシスタントコーチとして貴重な経験の場を与えて下さったRingkøbing Håndboldクラブ関係者の皆様と、現地での活動をサポート頂いた皆様に、心より感謝申し上げます。

また、海外研修員として素晴らしい経験の機会を与えて頂いた、日本オリンピック委員会、日本ハンドボール協会、日本スポーツ振興センター、ならびにご支援頂いた関係者各位の皆様に、重ねて深く感謝申し上げます。



送別会を開いてくれた選手達とJesper監督

研修員報告〈スキー 金城 芳樹〉



I. 研修題目

私はナショナルコーチとして、この先も携わりたいと考えた時に、スキージャンプの強豪国であるスロベニアで海外研修をすることで、スロベニアのコーチング論はもちろんのこと、多くの人脈も作ることができる考えた。

現にスロベニアはヨーロッパ各国のヘッドコーチやアシスタントコーチを多く請け負っており、諸外国の動向やルール変更の対応策など、多くの情報を各国から集めることができ、このような情報網を把握できる機会があるのもメリットだと感じたため。

II. 研修期間

2022年12月5日～2023年12月4日

III. 研修地及び日程

（1）主な研修地

Nordijsko društvo Rateče-Planica（スロベニア/プラニツァ）

（2）受け入れ関係者

Uroš Smolej

Jan Nemeček

（3）研修日程

①通常研修

2022年12月5日～2023年12月4日

②特別研修

2023年2月7日～2月13日

IV. 研修概要

（1）研修細目の概要

- ・スロベニアチームのコーチング方法
- ・ジャンプのトレーニング方法
- ・その他トレーニング

（2）研修方法

ラテツェ・プラニツァ・スキー協会を拠点に、スロベニアのコーチング方法及びトレーニング方法について研修及び実践をした。また特別研修でオーストリアにあ

るシーギムナジウム・シュタームスにて研修を行った。

V. 研修報告

(1) Nordijsko društvo Rateče-Planicaでの研修内容

スロベニアのプラニツァに位置するNordijsko društvo Rateče-Planicaで、中学生から高校生までの若い選手たちをUroš Smolej氏のもとアシスタントコーチとして研修を行った。

主な研修は、スキージャンプ台でのジャンプトレーニングと陸上トレーニングであり、これらのセッションでは、選手たちの技術を磨き、競技能力を高めるためのサポートを行った。

(2) Planicaのトレーニング環境

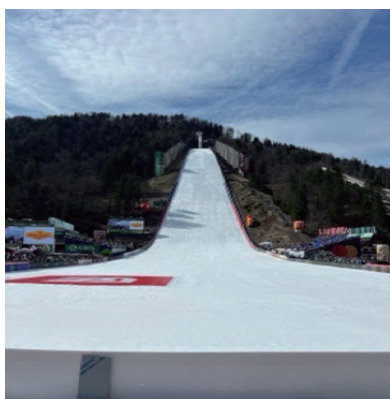
スキージャンプとノルディックコンバインドの分野で世界的に有名なトレーニング施設として知られ、この地域は、トレーニング設備や自然環境が優れており、選手が技術を磨き上げるのに最適な場所となっている。

具体的には、国際スキー連盟（FIS）の基準を満たす複数のジャンプ台がある。HS225mのフライングヒルを含む大型ジャンプ台から、ラージヒルHS139m、ノーマルヒルHS109mやジャンプを初めての選手に適したジュニアレベルの選手向けの小型ジャンプ台を含むと8基も備えている。これは世界的に見ても最高峰の環境と言える。夏季には特殊なプラスチックマットを使用して、雪がない季節でもジャンプ練習が可能である。

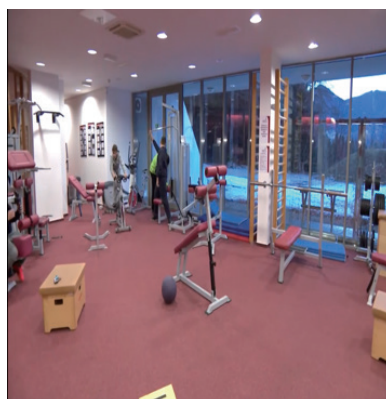
ジャンプ台の他にも様々な施設がある。風洞施設は選手が飛行時の姿勢や技術を改善するために使用される風洞設備があり、この施設では、空気力学を最適化し、ジャンプ時の飛距離を伸ばすための研究が行われている。日本にもJISSに同様の施設があり、



Planica 各種のジャンプ台



Planica HS240mのジャンプ台



Hotel DOM PLANICAのトレーニング施設



Hotel DOM PLANICAのトレーニング施設

同じく日々選手の技術や研究を行っている。ジャンプ台のすぐ麓にあるHotel DOM PLANICA Olympic Sports Centre Planicaでは、宿泊施設としてももちろんのこと、必要な体力を養うためのジムやトレーニングルームが充実しており、合宿地としても最適な環境である。

こうした環境を求め、世界各国からトップレベルの選手やチームが集まるため、国際大会前の練習や、異文化間の交流の場としても機能しており、Planicaでトレーニングをしている世界を目指している選手を初め、世界基準の競技レベルを肌で感じることができる最高の環境となっている。

（３）ナショナルチームの体制

スロベニアのナショナルチーム合宿に帯同させてもらうことは叶わなかったが、現地でヘッドコーチや研修先のコーチにナショナルチームの体制について話を聞くことができた。

日本チームと違う点は、選手、スタッフの人数が日本のジャンプチームに比べて倍以上いることだ。理由として、スロベニアではスキージャンプが国技に近いスポーツ

表 スロベニアの男子ナショナルチーム選手の在籍数

チーム	年代	選手数	選考基準
Aチーム	成績上位者	7名	WCランキング
Bチーム	20歳以上	7名	WCランキング COCランキング
DPNC1.2.3.4	15歳～19歳	32名	WCランキング COCランキング FISランキング 国内ランキング

*DPNCは1～4までカテゴリがあり、意味は日本語訳でナショナルノルディックセンター（ジュニアを統括する教育機関）

*DPNC1は、ジュニアナショナルチーム

表 スロベニアの男子ナショナルチーム選手の在籍数

チーム	役職	人数
Aチーム	ヘッドコーチ アシスタントコーチ ワックスマン トレーナー	12名
Bチーム	ヘッドコーチ アシスタントコーチ 選手所属のクラブコーチ ワックスマン トレーナー	約10名
DPNC1.2.3.4	各グループの担当コーチ 選手所属のクラブコーチ トレーナー	15名

だということが言える。(日本に例えると相撲に近い)

前頁の表にて、スロベニアチームのナショナルチームのカテゴリと在籍数を表にする。

表にして分かることはジュニア層へ特に力を入れて強化していることが分かる。代表コーチのみならず、各クラブのコーチが協力し、ジュニアの強化にあたり、そのためにも各コーチの共通認識（コンセプト）が重要となってくる。実際に現場で選手をコーチングするときにナショナルチーム及び各クラブのコーチたちも、選手へのコーチングについて相談していたのが印象的であった。詳しいスロベニアのコーチング論については、①スロベニアのコーチング論で記載する。

(4) Nordijsko društvo Rateče-Planicaでの通常研修

拠点である研修先のNordijsko društvo Rateče-Planicaでは、Uroš Smolej氏のもとアシスタントコーチとして、選手の映像撮影や映像分析、選手への陸上でのトレーニングメニューの作成をし、Uroš Smolej氏と共に選手へコーチングを行った。

日本チームがPlanicaに来た際には、チーム・選手のサポートを行い、そこでスロベニアで学んだコーチングを実践し、日本選手への感触を実際に確かめることができたのは良い機会となった。

①スロベニアのコーチング論

スロベニアのコーチング論について、まず具体的に述べたいと思う。スロベニアのコーチング論の軸は大きく2つと考える。その2つとは、スキージャンプの技術面では空中姿勢、身体的な面では柔軟性です。

まず技術面の空中姿勢については、幼少期から各所属のコーチがジャンプスキーの空中での板の開き方、空中で板が外側を向かない、空中の前半から後半にかけての板と身体の位置関係のバランスを細かくコーチングしており、スロベニア選手が規模の大きなジャンプ台ほど強さを発揮する根源となっている。

次に身体的な面では、徹底したストレッチである。スロベニアのナショナルチーム（ジュニア～シニア）に所属する選手は練習の一環として例えばストレッチを約1時間、帰宅後も各選手にお風呂あがりにストレッチの時間を約1時間課しており、スロベニア選手の特徴的な膝の屈曲角度の深い柔軟なアプローチ姿勢が作り上げられている。そうすることで、ストロークのあるテイクオフ動作に繋がっている。

スロベニアではこの共通認識に沿って選手の強化をしているので、ジュニアからシニアに上がってもテクニックの誤差を埋められ、若い選手が世界大会でも結果を残せている。

②Nordijsko društvo Rateče-Planicaのトレーニング

スロベニアでは基礎教育（6歳～15歳、9年間）、高等学校（以下高校、15歳～19歳、3年～5年）、高等教育（19歳～27歳、4年以上。日本の大学に相当。以下大学）の4段階に分かれている。研修先のクラブでは、基礎教育～高校生までの年代の選手が所属しており、私は高校生の選手7名（男5名、女2名）を主に担当してコーチン

表 大会期間ではないトレーニングスケジュール例

Day	Morning	Afternoon
Monday		担当コーチとミーティング
Tuesday	09:00-12:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica	16:00-17:00 球技（バスケットボール） 17:00-18:00 プライオメトリクス/ストレッチ
Wednesday	09:00-12:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica	16:00-17:00 球技（サッカー） 17:00-18:00 ジャンプに特化したテクニクトレーニング ストレッチ
Thursday		14:00-17:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Kranj
Friday	09:00-12:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica	14:00-17:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Kranj
Saturday	08:00-12:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Villach	14:00-17:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica
Sunday	08:00-12:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Villach	

グしていた。

トレーニングは、主にジャンプトレーニングと陸上トレーニングで、週によって午前にジャンプトレーニング、午後に陸上トレーニングと、毎週のトレーニング予定を研修先のコーチと話し合い毎週の予定を組み立てていた。

大会のない週には、研修先が拠点とするPlanicaのジャンプ台を主に使用する一方で、さらなる技術向上を図るため、Planicaから車で約40分の距離にあるKranjや、30分程度で到達するオーストリアのVillachに位置する様々なジャンプ台でのトレーニングも頻繁に行われた。これらの場所では、異なる条件下でのジャンプ技術を磨き、多様な経験を積むことが可能であった。

また、高校生選手たちは、所属する各高校の専任のコーチの指導のもと、学校設備を利用してウエイトトレーニングに励んでいた。このため、選手たちが研修先のクラブチームでウエイトトレーニングを行う機会は一度もなかった。研修先のクラブでは、ジャンプ技術の向上を最優先とし、若手選手の潜在能力を引き出し、ジャンプ技術を格段に向上させることを意図して、ジャンプトレーニングを中心に据えたトレーニングプログラムが組まれていた。

高校生選手たちは、ジュニアカテゴリーにおいて切磋琢磨し、より高いレベルへの進出を目指し、ジャンプ技術に関する知識を吸収することに熱心で、毎日のジャンプ



ゴムチューブを活用したテイクオフトレーニング



空中での板の開きを意識させるトレーニング



空中姿勢をキープするトレーニング



動くローラーボードの上でボールを挟んで力を伝えるトレーニング

トレーニングでは、技術の向上に向けて試行錯誤を重ねており、自らの限界に挑戦し続けているように見受けられた。このようにして、選手は自分たちのジャンプ技術を徐々に磨き上げ、将来の大舞台での活躍に向けて着実にステップアップを目指していた。

大会期間中のトレーニングは、選手たちが大会で最高のパフォーマンスを発揮するための調整とし、この期間のトレーニング強度は全体的に控えめに抑え、選手の体調や身体の状態に合わせてジャンプの本数を調節します。特に調子が良い選手には、無理にジャンプの本数を重ねさせることなく、コンディショニングやジャンプ用具のメンテナンスに時間を費やすようにした。

日本の選手もそうだが、研修先の選手も、大会が近づくにつれて、「もっと自分ができる」という強い願望から、これまでの練習で積み重ねてきたこととは、異なる新たな課題に挑戦する傾向があった。これは、選手の成長意欲を示していると同時に、焦りから不必要な変更を加えてしまうリスクもはらんでいる。こうした選手に対しては、担当コーチと共に密にコミュニケーションをとり、各選手に最も適した課題に取り組むことを確認した。研修先のクラブが目指すのは、選手が自ら設定した目標に

表 大会期間のトレーニングスケジュール例

曜日	午前	午後
月曜日		担当コーチとミーティング
火曜日	08:00-11:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica	13:00-16:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica
水曜日		16:00-17:00 球技（バスケットボール） 17:00-18:00 プライオメトリクス/ストレッチ
木曜日	08:00-11:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Planica	14:00-17:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Kranj
金曜日	08:00-12:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Velenje	15:00-16:00 ジャンプに特化したテクニクトレーニング ストレッチ
土曜日	08:00-11:00 ウォーミングアップ ジャンプ in Velenje	
日曜日	大会 in Velenje	

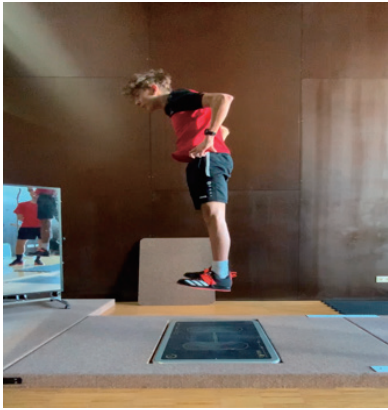
沿って進むこと、そして大会での成功へと導くためのブレないコーチングであった。

このようなプロセスを通じて、選手たちは自己の技術を洗練し、自信を持って大会に臨む準備を整える。コーチとしては、選手たちが練習で培った技術を大会で存分に発揮できるようサポートすることが最優先事項である。この大会期間のトレーニングとコーチングのアプローチは、選手が好成績を残すための土台を作り上げていると感じた。

（５）シーギムナジウム・シュタームスでの特別研修

研修先のコーチであるUroš Smolej氏の紹介で、オーストリアのシーギムナジウム・シュタームスにあるスキー学校で、14歳～17歳の男子スキージャンプ選手（まだ入学して1年～2年の学生のグループ）のトレーニングに参加した。そこでは、陸上トレーニング前に選手のフォースプレートの測定を月に1～2回、大会の前後に行い、選手の垂直方向に対する力の伝わりを数値化して選手と共有し、そのデータを元に個々にトレーニングメニューを見直していた。数値化することで、選手はより自分自身の動きの状況を理解し、トレーニングにおける質の向上、何よりも選手自身の考える力を育てることに繋がっていると感じた。

シーギムナジウム・シュタームスにあるスキー学校のすぐ近くにある、ジャンプ台でのトレーニングも視察した。今の日本チームのジャンプのコンセプトはオーストリアチームのコンセプトを多く取り入れているので、コンセプトの元になったオーストリアのコーチングを間近で視察することができ、とても感慨深かった。日本のチームコンセプトは、「骨で組んで骨で立つ」で筋力ではなく、摩擦の少ない氷の助走路で



フォースプレートの測定の様子 ゴムチューブを活用した体幹トレーニング 壁スクワットトレーニング



デプスジャンプトレーニング ゴムチューブを利用したテイクオフトレーニング

スピードを活かしたアプローチ姿勢（滑降姿勢）、テイクオフ動作（空中への飛び出し動作）をできるようにこのコンセプトを掲げている。つまりアプローチの助走路を重点的においたコンセプトとなっている。

そしてオーストリアの15歳未満の選手はジャンプ板とジャンプシューズを繋ぐ踵の部分（ビンディング）が「紐のクリップ、以下紐のビンディング」（次頁の写真1を参照）を使用していた。

今の主流のビンディングは棒状の金具（次頁の写真2を参照）を使用しており、空中でのスキー操作がオートマチックになる反面、選手自身での操作性が紐のビンディングに比べて落ちてしまう傾向にある。こうした理由から幼少期やジュニア期の選手には今の主流のビンディングではなく、「紐のビンディング」で空中の感覚を身に付けさせ、その後、今の主流のビンディングに使用させるシステムができている。このシステムは日本チームのジュニアにも適用するべきだと強く感じた。この空中姿勢は実際に飛んでみて身に付けていく部分のため、今も世界的にベテラン勢が長年結果を残し続けている理由の1つに、紐のビンディングを使用してきた期間が長く、空中感覚を磨いてきたことが要因としてあると感じた。



写真1 紐のビンディング



写真2 棒状のビンディング

Ⅵ. 研修の成果とその活用方法について

今回の研修を通じて得られた最大の成果は、我々日本チームのコンセプトが正しい方向性を指しているという確信を得られた。このコンセプトは、特別研修で述べたように、ジャンプ台でのアプローチに焦点を置いたものであり、その効果が今回の研修で改めて実感できた。

スキージャンプという競技は、選手個々の身体のバランスや特性が非常に重要で、これらは複雑に絡み合っている。そのため、一般的なスポーツでよく見られるような、すべての選手に適用可能な標準的な教材やトレーニングメソッドは現状日本にはない。そのため各選手の個性や特性を理解し、それに適したコーチングを行う必要がある。

研修先での体験は、このような背景のもと、日本チームが現在取り組んでいるコンセプトに基づいてコーチングを実施したところ、研修先のコーチや選手たちからもその方法論が理解され、受け入れてもらえた。この結果は、日本チームのコンセプトが国際的な視点でも通用すること、また、異文化間でのスポーツ指導においても共通の理解を築くことが可能であることが分かった。

本研修の活用方法は、日本のジュニアチームにスロベニアのジュニアチームのようなシステムや身体作りを参考にすることが重要だと感じた。通常、ジュニア選手への指導は各所属チームのコーチが行い、国際大会に際してはジュニア担当のナショナルコーチが帯同する。しかし、ここ数年、男子ジュニアチームは期待通りの成績を残せていない。

この状況を改善し、選手の強化を図るためには、ジュニアチームのシステムやトレーニング方法の見直しが必要である。私はヘッドコーチと協力して、スロベニアのジュニア強化プログラムを参考にしながら、日本の環境に合った効果的なジュニアチーム構築を目指していく。この取り組みにより、日本のジュニアチームが国際大会でより良い成績を収めるための基盤を築くことができると考える。

最後に

Nordijsko društvo Rateče-Planicaにて研修を受ける機会をいただいたことに深く感謝している。Uroš Smolej氏並びに選手たちには、研修の初日から温かく迎えていただき、終始、一員として活動する中で多大な学びと経験を得ることができた。Smolej氏の

指導のもと、スキージャンプ競技の深い理解と技術の向上につながった。非常に充実した時間を過ごすことができ。このような貴重な経験を通じて、私自身のスキルだけでなく、スポーツに対する情熱も一層深まった。

この素晴らしい研修の機会を提供してくださった日本オリンピック委員会、全日本スキー連盟、そして日本スポーツ振興センターの関係者の皆様に、心からの感謝を表します。また、研修を通じて築かれた人間関係や知識の共有は、今後の活動において計り知れない価値を持つものと確信している。研修で学んだ知識と技術を活かし、スキージャンプ界の発展に貢献していく所存である。再度、皆様のご支援に深く感謝申し上げます。

資 料

1. スポーツ指導者海外研修事業実施要項
2. スポーツ指導者海外研修事業 研修員一覧
3. スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

スポーツ指導者海外研修事業実施要項

1. 趣旨

本会加盟団体に所属している新進気鋭の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員（以下「海外研修員」という）として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態等について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者を育成する。

2. 海外研修員の種類と研修期間

- (1) 海外研修員は長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）とする。
- (2) 海外研修員は、原則として1ヶ所において集中的に研修するものとする。

3. 海外研修員としての条件

海外研修員は、次の条件を全て満たしている者でなければならない。

- (1) 研修先の受け入れの保証があること。
- (2) 勤務先等の所属長より本研修の承諾を受けていること。
- (3) 外国での研修に堪えうる語学力を有すること。
- (4) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること。
- (5) 原則、帰国後、本会の強化スタッフまたは競技団体における指導者として活動できること。

4. 海外研修員の募集人数

募集人数については、若干名。

5. 海外研修員候補者の選考

- (1) 本会は本会ならびに本会加盟団体を対象に、海外研修員にふさわしい者（以下「候補者」という）を募集する。
- (2) 前項により当該団体（本会含む）が候補者を推薦する場合には、別に細則で定める海外研修員候補者推薦書を本会に提出するものとする。
- (3) 本会は、ひとりでも多くの「指導者」を、ひとつでも多くの団体（研修員派遣中の団体も含む）から派遣するよう選考する。同一団体から複数名の推薦を行う場合は、団体内で優先順位を付ける。

6. 海外研修員の決定

- (1) 本会は前項の推薦書に基づき書類選考ならびに面接の上、海外研修員を正式決定するものとする。
- (2) 海外研修員は、別に細則で定める誓約書及び研修計画書を本会に提出しなければならない。
- (3) 出発まで各自語学研修を行う。

7. 海外研修員に支給する経費

海外研修員に対する経費は、別に細則で定める要領で支払うものとする。

8. 海外研修状況の報告

海外研修員は3ヶ月毎に別に細則で定める研修状況報告書を本会に提出しなければならない。

9. 海外研修の中止

本会は海外研修員が本要項に違反したり、不適当な行為があったときは、その研修をとりやめ、帰国を命じることができるものとする。当該者は、その指示に従うものとする。

10. 海外研修報告書の提出

海外研修員は、帰国日より1ヶ月以内に別に細則で定める研修報告書を提出しなければならない。

11. その他

- (1) 海外研修員は帰国後、本会の開催する諸事業において研修報告を行う。
- (2) その他、海外研修員の派遣に関し必要な事項については別に細則で定めるものとする。

*平成12年4月1日	一部改訂
*平成14年4月1日	一部改訂
*平成16年4月1日	一部改訂
*平成18年11月1日	一部改訂
*平成22年12月22日	一部改訂
*平成27年1月20日	一部改訂
*平成28年4月1日	一部改訂
*平成30年4月1日	一部改訂
*令和2年3月31日	一部改訂（令和2年4月1日より適用）

スポーツ指導者海外研修事業 派遣者一覧

競技／年度	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3
陸上	澤木啓祐	宮川千秋	鬼塚純一	村木征人	室伏重信		永井 純		宮下 憲		吉田雅美		
水泳	*田口信教	松井 守	宮原利幸 二木広幸				元好三和子			高橋繁浩 高橋繁浩 坂本 弘	中森智佳子	*田中 京	
サッカー	森 考慈		松本育夫			田村 脩		山口芳忠					田嶋幸三
スキー	*笠谷幸生 *富井澄博					古川年正					*八木弘和		北島光則
テニス		本村 行									田村伸也		
ボート													
ホッケー													
ボクシング*									荻原千春				
バレーボール			古沢久雄		荒木田裕子	荒木田裕子							
体操		監物永三		北川淳一					*具志堅幸司		加納弥生	秋山エリカ	
バスケットボール	西尾末広	田中徹雄											
スケート					入沢孝一								
アイスホッケー													
レスリング*	*市口政光			藤本英男		富山英明				高田裕司	宮原厚次		
セーリング*		松山和興											
ウエトリフティング*	福田 弘		*山下 修			*細谷治朗					三宅義信		
バドミントン	早川清孝		樫塚正一										
自転車													
卓球										須賀健二			前原正浩
相撲													
馬術									石黒健吉				
フェンシング*			*藤沢義彦										
柔道	中村良三		重岡孝文		柏崎克彦			山下泰裕			細川伸二		松岡義之
バドミントン				関根義雄							蘭 和真		
ライフル射撃	栗田俊昭		*香西俊輔					市村 忠					
剣道	巽 申直	志沢邦夫											
近代五種			富安一朗										
ラグビー				水谷 真									
カヌー		本田宗洋					福里修誠						
空手道			真野高一									西村誠司	佐久本嗣男
なぎなた	田中ミヤ子												
ボブスレー・リュージュ			市橋善行								鈴木省三		
野球													
武術太極拳													桑原典子
トライアスロン													
デコンドー													
パ・イスロン													
合計	13	8	13	5	4	5	3	3	4	3	10	3	8

※合計数は延人数

*印は長期(2年)派遣者

平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17
		青戸慎司		内田孝男		*土江寛裕				吉田孝久	近野義人		今村文男
		緒方茂生	緒方茂生		鈴木大地					岩崎恭子	林 享		*立花美哉
	野地照樹										木村孝洋		
			*佐藤 晃				菅野範弘		斗澤由香子	斗澤由香子			
				西野真一		米沢 徹				*植田 実			
			杉藤洋志	杉藤洋志									
						本 博国							
*田中幹保					佐藤浩明							山田晃豊	
			梶谷信之		瀬尾京子	瀬尾京子	三浦華子	*畠田好章		菅原リサ	*松永里絵子	橋口美穂	原田睦巳
								青柳 徹	青柳 徹	和田貴志	和田貴志		
	清野 勝										坂井寿如		
		*佐藤 満			赤石光生					嘉戸 洋			
							松本真也						
田口 隆			東根明人		松井幸嗣		玉村健次		*田中 茂			*山田永子	
			大門 宏										
								渡辺理貴			河野正和		
	齋藤一雄												
	*後藤浩二郎												
山口 香	中西英敏			田辺陽子	岡田弘隆	持田達人	増地千代里	金野 潤	長井淳子	中村行成	檜崎教子	中村兼三	阿武教子
	金坂広幸						*藤井 彌		三野卓哉				
			勝田 隆				山本 巧						
	成田寛志												
		栗山浩司											
筒井大助								小島啓民					
					二宮秀夫				神庭裕里				
									佐藤吉朗				
4	7	4	7	4	7	5	7	5	7	8	8	4	4

競技／年度	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30
陸上			山崎一彦		高岡寿成	柳澤 哲	杉林孝法	今井美希	谷川聡	岩水嘉孝			
水泳		*稲田法子				原田早穂		中村真衣	*塩田義法	*三木二郎			
サッカー			猿澤慎治			今泉守正	廣山 望	田村奈津枝	山尾光則 坂尾美穂	広瀬統一		小川秀樹	*須藤啓太
スキー	*工藤昌巳	佐々木耕司								安食真治		久保貴寛	*河野恭介
テニス	谷澤英彦								土橋登志久	*岩渕聡			近藤大生
ボート				中村さなえ				*大戸淳之介		*白井祐介			
ホッケー													
ボクシング*													
バレーボール	松本洋			*中垣内祐一 小林 敦				*菅野幸一郎		荻野正二	大久保茂和		山村宏太
体操			*村田由香里	上村美揮			原 千華	黒田真由	*鹿島丈博 大島杏子	*遠藤由華 *森起人		桑原俊	古城梨早
バスケットボール													
スケート			白幡圭史	神野由佳					*出島茂幸				*小原英志
アイスホッケー													
レスリング*							*笹本 陸			*米満達弘			
セーリング*				中村健一		橋元郷							
ウエイトリフティング*													
バドミントン								*高橋豊樹		*舎利弗学			
自転車				沖 美穂				*福島晋一 *小田島梨絵					
卓球					三原孝博		*梅村 礼						
相撲													
馬術													
フェンシング*	岡崎直人						*和田武真		長良将司				
柔道			*井上康生			*塚田真希	*谷本歩実					金丸雄介	
バドミントン													
ライフル射撃													
剣道													
近代五種													
ラグビー													
カヌー				上原茉莉		*栗本宣和							
空手道													
なぎなた													
ボクシング・リユージュ													
野球													
武術太極拳													
トライアスロン													
デコンター													中川貴哉
パ・アイスロン					小舘 操					進藤隆			
合計	4	2	5	8	3	6	7	9	9	12	1	4	7

令和1	令和2	令和3	令和4	令和5	令和6	計
*松岡佑起						23
						22
松原英輝	*見汐翔太	片桐央視				20
			金城芳樹			16
						10
						6
				*藤本一平		2
						3
*塚田圭裕			*青木晋平		*白鳥 歩	17
					内山由綺	26
						3
						10
*山中武司						4
		*湯元進一			*乙黒圭祐	13
						5
						5
		*嘉数陽介		*富田恭介		13
						5
						7
						2
						3
*松岡慧						6
			*海老沼匡	*大野将平	平岡拓晃	26
						3
						7
						3
						2
						4
						5
						5
						2
						4
						3
						4
*福井英郎			*忽那静香			4
						2
						3
6	1	3	4	3	4	261

スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

発行日現在

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
1	田口 信教	54年長期	水泳(競泳)	昭和54年10月24日 ～昭和56年10月31日	アメリカ インディアナ州 ブルーミントン	インディアナ大学 ジェームズ・E・カンシルマン	競泳の指導技術の理論と実践
2	市口 政光	54年長期	レスリング (グレコローマン)	昭和54年9月20日 ～昭和56年9月18日	アメリカ ウィスコンシン	ウィスコンシン大学 ウィリアム・P・モーガン	レスリング競技の運動構造と 技術分析に関する比較研究
3	笠谷 幸生	54年長期	スキー(ジャンプ)	昭和54年11月29日 ～昭和56年12月3日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 ジャンプコース 養成コース	ジャンプ競技におけるコーチング トレーニング法の修得
4	富井 澄博	54年長期	スキー(アルペン)	昭和54年9月5日 ～昭和56年5月15日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 アルペンコーチ 養成コース	滑降競技における運動機能技術 分析に関する比較研究
5	森 孝慈	54年短期	サッカー	昭和54年11月21日 ～昭和55年11月20日	ドイツ ケルン	西ドイツ プンデス フットボールリーグ IFCケルン	ナショナルコーチにふさわしい 知識の習得、指導実践の現地研修
6	沢木 啓祐	54年短期	陸上競技(中・長距離)	昭和54年9月16日 ～昭和55年7月7日	アメリカ オレゴン州	オレゴン大学 オレゴントラッククラブ	米国における中・長距離 コーチング法の修得
7	早川 清孝	54年短期	ハンドボール	昭和54年10月11日 ～昭和55年9月25日	ドイツ ケルン	ケルン ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	西ドイツハンドボール組織のあり方 選手育成・ナショナルチームの指導体制
8	西尾 末広	54年短期	バスケットボール	昭和54年9月18日 ～昭和55年9月15日	アメリカ レキシントン	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールについての コーチング論の研修
9	福田 弘	54年短期	ウエイトリフティング	昭和54年11月5日 ～昭和55年10月30日	アメリカ ロサンゼルス	ロサンゼルス マーベリッククラブ他	ウエイトリフティングの理論 育成コーチ・システム
10	栗田 俊昭	54年短期	ライフル射撃	昭和54年12月5日 ～昭和55年11月24日	ドイツ ヴィスバーデン	西ドイツ ヴィスバーデン射撃学校	射撃技術の修得・コーチ学 トレーナー課程の研修
11	中村 良三	54年短期	柔道	昭和54年10月6日 ～昭和55年10月30日	フランス パリ	フランス柔道連盟	外人選手の特性への対応策 コーチング学の研修
12	巽 申直	54年短期	剣道	昭和54年10月18日 ～昭和55年9月10日	イギリス ロンドン	ネンリキ道場 英国剣道連盟	英国人の剣道観に関する実態調査
13	田中 ミヤコ	54年短期	なぎなた	昭和54年10月18日 ～昭和55年10月18日	アメリカ ロサンゼルス	アメリカ なぎなた連盟他	アメリカにおける武道(スポーツ)の 動向等調査
14	監物 永三	55年短期	体操	昭和55年10月30日 ～昭和56年10月24日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス校	体操競技のコーチング 体操競技国際公認用語の習得
15	松井 守	55年短期	水泳(水球)	昭和55年10月17日 ～昭和56年10月16日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー ブタペスト B. V. S. Cクラブ	水球の技術研修
16	松山 和興	55年短期	ヨット	昭和55年11月15日 ～昭和56年11月12日	イギリスワイト島	英国ナショナル・ セイリングセンター 王立ヨット協会	ヨット・コーチ学の研修・選手強化 施設、方法の調査
17	本田 宗洋	55年短期	カヌー	昭和55年11月11日 ～昭和56年12月10日	ドイツ デュイスブルグ	西ドイツスポーツシュレー 西ドイツカヌー協会	カヌーの漕法および指導法
18	田中 徹雄	55年短期	バスケットボール	昭和55年10月15日 ～昭和56年10月15日	アメリカ ケンタッキー	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールコーチ指導法 ウエイト・トレーニング他
19	宮川 千秋	55年短期	陸上競技(短距離)	昭和55年11月8日 ～昭和56年9月20日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ヘイワード	陸上競技における指導法 (特に短距離走について)
20	本村 行	55年短期	テニス	昭和55年11月5日 ～昭和56年11月4日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス他	テニス指導法(特にジュニアの指導法)
21	志澤 邦夫	55年短期	剣道	昭和55年12月26日 ～昭和56年12月27日	オーストラリア シドニー他	オーストラリア剣道連盟	オーストラリアの剣道実態調査 コーチ法の研修
22	香西 俊輔	56年長期	ライフル射撃	昭和56年11月15日 ～昭和58年11月15日	アメリカ テキサス	ラニー・パシヤム射撃学校	射撃技術の研修 メンタル・マネージメント・プログラムの研修
23	藤澤 義彦	56年長期	フェンシング	昭和56年8月2日 ～昭和58年8月1日	フランス パリ	国立スポーツ研究所 (I. N. S. E. P)	フェンシング基礎技術、競技規則 審判技術指導法等の研修
24	山下 脩	56年長期	ウエイトリフティング	昭和57年1月29日 ～昭和59年1月28日	ドイツ ミュンヘン	ナショナルスポーツセンター バイエルン州ウエイトリフティング連 盟	ウエイトリフティング理論、育成システム クラブ組織、コーチングシステム
25	古沢 久雄	56年短期	バレーボール	昭和56年12月15日 ～昭和57年10月13日	ブルガリア ソフィア	ソフィア体育大学 ブルガリアバレーボール連盟	バレーボール指導法の体系とスポーツ 社会学理論およびゲーム分析
26	鬼塚 純一	56年短期	陸上競技 (混成競技)	昭和56年9月10日 ～昭和57年9月11日	アメリカ カリフォルニア州	カリフォルニア州立大学 ロングビーチ校	混成競技における技術水準および競技水準向上に關する 具体的方法論の研修
27	宮原 利幸	56年短期	水泳(水球)	昭和56年10月25日 ～昭和57年10月31日	アメリカ カリフォルニア州	アメリカ水球 ナショナルチーム	水球競技におけるコーチ学の研修と技術の研修
28	二木 廣幸	56年短期	水泳(飛込)	昭和56年10月13日 ～昭和57年10月2日	アメリカ カリフォルニア州	ミッションビエホ・スイム・クラブ マイアミ大学	飛込技術の修得およびエーजी・グループの指導法の研修
29	松本 育夫	56年短期	サッカー	昭和56年10月9日 ～昭和57年10月8日	ドイツ ケルン	西ドイツサッカー協会 I. F. C. ケルン	西ドイツにおけるジュニア選手の育成とその方法
30	櫻塚 正一	56年短期	ハンドボール	昭和56年10月13日 ～昭和57年9月9日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	ナショナルプレーヤーの指導内容と指導体系、クラブチー ムシステム等研修
31	富安 一郎	56年短期	近代五種	昭和56年9月1日 ～昭和57年8月31日	アメリカ テキサス州	サンアントニオ近代五種トレーニ ング・センター	選手強化策の現状把握、ジュニア底辺の普及対策 指導者養成の実態調査
32	真野 高一	56年短期	空手道	昭和56年11月25日 ～昭和57年11月25日	アメリカ ニューヨーク州	コロンビア大学体育学部 全米空手道連盟	競技力向上に関する研究(体力・技術) 空手におけるパ ワー、体力向上のための理論と実践
33	市橋 善行	56年短期	ボブスレー	昭和56年11月10日 ～昭和57年11月10日	スイス サンモリツ他	スイスボブスレー連盟 イタリア・コルチナ ボブスレー製造メーカー	ボブスレー競技、技術向上のための実技研修 ボブス レー機の修理調整研修

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
34	重岡 孝文	56年短期	柔道	昭和56年12月3日 ～昭和57年12月2日	ドイツ ケルン	西ドイツ柔道連盟 ドイツ体育大学 (D. S. H. S)	ヨーロッパ各国の指導体制、トレーニング方法の研究、選手強化対策・ヨーロッパ選手権大会の研修と分析
35	村木 征人	57年短期	陸上競技(跳躍)	昭和57年10月21日 ～昭和58年10月14日	アメリカ サンティエゴ	カルフォルニア州 サンティエゴ大学	跳躍競技の技術研修
36	北川 淳一	57年短期	体操	昭和57年9月1日 ～昭和58年9月2日	カナダ トロント	ヨーク大学 カナダ体操協会	体操競技の技術水準向上のための指導法研修
37	藤本 英男	57年短期	レスリング (グレコローマン)	昭和57年10月14日 ～昭和58年10月15日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー レスリング協会	グレコローマンスタイルの高等技術の修得技術分析と実践での応用トレーニング法の研究
38	関根 義雄	57年短期	バトミントン	昭和57年12月1日 ～昭和58年11月29日	イギリス ロンドン	ウインブルドン スカッシュ&バトミントンクラブ	世界トッププレイヤーの強化方法およびジュニア対策についての調査研究
39	水谷 眞	57年短期	ラグビー	昭和57年9月2日 ～昭和58年10月29日	イギリス ロンドン	イングランド ラグビー協会	戦法、技術論、およびコーチ学
40	入澤 孝一	58年短期	スケート(スピード)	昭和59年2月20日 ～昭和60年3月19日	ノルウェー オスロ	ノルウェースケート連盟 オスロ大学	ヨーロッパスピードスケートの強化体制およびコーチングの研修
41	柿崎 克彦	58年短期	柔道	昭和58年5月1日 ～昭和59年4月7日	イギリス ロンドン	BUDOKWAI イギリス柔道連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道技術およびトレーニング研究
42	室伏 重信	58年短期	陸上競技(投てき)	昭和58年10月16日 ～昭和59年10月4日	アメリカ ロサンゼルス	カリフォルニア大学 ロサンゼルス	アメリカ投てき選手を中心としたトレーニングおよび技術研究
43	荒木田 裕子	58年短期 59年短期	バレーボール	昭和58年10月12日 ～昭和60年10月30日	スイス ドイツ	スイスバレーボール連盟 西ドイツバレーボール連盟	ヨーロッパ諸国のバレーボール戦術 技術研修と情報収集
44	細谷 治朗	59年長期	ウエイトリフティング	昭和60年1月15日 ～昭和62年1月10日	ハンガリー ブタペスト	タタニアスポーツクラブ ハンガリーナショナルチーム	ウエイトリフティング理論、クラブ組織論、育成システム、コーチシステム
45	富山 英明	59年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和59年12月16日 ～昭和60年12月15日	アメリカ アイオワ州	アイオワ州立大学	レスリング競技のコーチ学
46	田村 脩	59年短期	サッカー	昭和59年9月19日 ～昭和60年9月24日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー大学他	サッカーの指導方法および実践
47	古川 年正	59年短期	スキー(アルペン)	昭和59年10月25日 ～昭和60年10月21日	アメリカ バーモント	アメリカ・スキー ナショナルチーム	アルペン競技における運動構造と技術分析
48	本間 三和子	60年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	昭和60年8月15日 ～昭和61年8月23日	カナダ カルガリー	アクア・ベル スイミングスクール カルガリー大学	シンクロナイズドスイミングのコーチ法
49	永井 純	60年短期	陸上競技(中距離)	昭和60年11月16日 ～昭和61年11月15日	オーストラリア メルボルン	メルボルン大学	陸上競技のコーチング法
50	福里 修誠	60年短期	カヌー	昭和60年10月8日 ～昭和61年10月3日	ドイツ デュセルドルフ	西ドイツカヌー協会	カヌーの指導法と双方漕法
51	山下 泰裕	61年短期	柔道	昭和61年8月25日 ～昭和62年8月26日	イギリス ロンドン	イギリス柔道連盟	英国及びヨーロッパ各国の柔道強化対策と指導法
52	山口 芳忠	61年短期	サッカー	昭和61年10月24日 ～昭和62年10月30日	ドイツ ミュンヘン	西ドイツサッカー協会 F. C. バイエルン ミュンヘン	西独プロサッカーにおける指導方法及びゲームの戦い方
53	市村 忠	61年短期	ライフル射撃	昭和61年11月9日 ～昭和62年11月8日	ドイツ グイスバーデン	西ドイツ射撃協会 国立射撃学校	ライフル射撃における力学及び心理学的要素についての個人間の差異の解析に関する研究
54	具志堅 孝司	62年長期	体操	昭和62年9月17日 ～平成元年9月4日	ドイツ チュービンゲン	チュービンゲン大学	体操競技の指導方法
55	萩原 千春	62年短期	ボクシング	昭和62年10月1日 ～昭和63年10月5日	アメリカ クラマスフォール	オレゴン工科大学	アメリカにおけるボクシングのトレーニング法
56	宮下 憲	62年短期	陸上競技(障害)	昭和62年8月26日 ～昭和63年8月29日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学	ハードル種目に関する技術・トレーニング方法論の研究
57	石黒 建吉	62年短期	馬術	昭和62年11月12日 ～昭和63年11月12日	イギリス ウィストン	アッシュグローブファーム トレーニングセンター	人馬の育成・審判員、翻訳、乗馬育成に関する研修・調査
58	高橋 繁浩	63年短期 元年短期	水泳(競泳)	昭和63年10月14日 ～平成2年9月16日	アメリカ コロラドスプリングス	コロラドスプリングス スポーツ科学研究所	運動生理学を中心に水泳の科学的トレーニング及びコーチングについて
59	須賀 健二	63年短期	卓球	昭和63年10月13日 ～平成元年10月8日	イギリス ヘスティング	国際卓球連盟	卓球コーチ学研修及び国際卓球連盟について
60	高田 祐司	63年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和63年11月5日 ～平成元年10月26日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア大学	レスリングのトレーニング方法、指導法及び科学性について
61	八木 弘和	元年長期	スキー	平成元年11月11日 ～平成3年9月18日	オーストラリア ザールフェルデン	オーストラリア スキー連盟	ジャンプ一流国の強化システムとトレーニング方式の研修
62	吉田 雅美	元年短期	陸上競技(やり投)	平成元年9月15日 ～平成2年9月14日	アメリカ シアトル	ワシントン大学	投てき競技者に必要な基礎的トレーニング法、栄養学、素材発掘の要点等の研修
63	坂本 弘	元年短期	水泳(競泳)	平成元年10月25日 ～平成2年10月24日	アメリカ コーバリス	オレゴン州立大学	競技者の指導テクニック及び泳法テクニック
64	田村 伸也	元年短期	テニス	平成元年10月3日 ～平成2年10月2日	アメリカ フロリダ	Harry Homman Tennis Camp	テニスコーチ学の全般についての研修
65	宮原 厚次	元年短期	レスリング	平成元年11月1日 ～平成2年10月31日	ドイツ フランクフルト	西ドイツ レスリング協会	グレコローマンスタイル技術研修及びコーチ学研修
66	三宅 義信	元年短期	ウエイトリフティング	平成元年11月6日 ～平成2年11月2日	アメリカ サンフランシスコ	アメリカ ウエイトリフティング協会	ウエイトリフティングのコーチ学、スポーツクラブ組織におけるシステムと指導方法、軍隊における選手指導とそのシステム

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
67	細川 伸二	元年短期	柔道	平成元年11月4日 ～平成2年11月3日	フランス バリ	フランス柔道連盟	フランスを中心としたヨーロッパにおける科学的トレーニングの理論を含む選手強化の対策の現状と比較検討及び社会体育としての普及発展状況とその指導方法について
68	蘭 和真	元年短期	バトミントン	平成元年10月10日 ～平成2年10月9日	イギリス ロンドン	英国バトミントン協会	イギリスを中心としたヨーロッパ各国の選手強化策、特にオリンピック対策(体制、組織、方法)の調査
69	鈴木 省三	元年短期	ボブスレー	平成元年12月10日 ～平成2年12月9日	カナダ カルガリー	カルガリー大学	医・科学的サポートの現状、選手育成システム、トレーニング計画と年間計画
70	加納 弥生	2年短期	体操	平成2年9月26日 ～平成3年9月19日	アメリカ	ユタ大学	体操競技の指導方法(コレオグラフィ)と選手育成システム
71	西村 誠司	2年短期	空手道	平成2年11月1日 ～平成3年10月31日	アメリカ シアトル	アメリカ空手道連盟	アメリカ大陸の空手道近代技術の研究
72	水野 智佳子	2年短期	水泳(競泳)	平成2年10月27日 ～平成3年10月26日	アメリカ コロラドスプリングス	USOCスポーツ科学研究所	競技者の泳法及び指導法
73	田中 京	3年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成3年9月12日 ～平成5年9月11日	アメリカ	Walnut Creek Aquanuts Synchronized Swimming Club	ウォールナットクリークでの実践トレーニング方法及びコーチング研修他
74	秋山 エリカ	3年短期	体操(新体操)	平成3年10月5日 ～平成4年8月15日	ロシア	Ретной Вокзал (Динамо) Москва	新体操の指導方法とソビエトにおける選手育成システムの研修
75	田嶋 幸三	3年短期	サッカー	平成3年10月7日 ～平成4年9月27日	ドイツ イタリア	サンブトリア ジェノバ他	サッカー選手の一貫指導、特に10～18歳迄のトップ選手の指導システムの研修
76	松岡 義之	3年短期	柔道	平成3年11月8日 ～平成4年11月7日	アメリカ	アメリカ柔道連盟(VSJF)他	アメリカにおける科学的トレーニング理論・方法を含む選手強化対策の現状と比較検討。社会体育としての柔道の普及発展状況とその指導方法について研修
77	前原 正浩	3年短期	卓球	平成3年9月16日 ～平成4年9月15日	イギリス	国際卓球連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ各国卓球協会の指導体制、強化体制、トレーニング方法の研修
78	勝部 典子	3年短期	武術太極拳	平成3年11月27日 ～平成4年11月26日	中国 北京	北京体育学院	武術競技「南拳」の競技技術及びコーチングメソッドを北京市、中国武術研究会にて研修
79	佐久本 嗣男	3年短期	空手道	平成3年11月3日 ～平成4年11月2日	ドイツ	ドイツ トレーナーアカデミー他	ヨーロッパにおける空手道近代トレーニングの実態を視察調査、研究するとともにその指導法の研修
80	北島 光則	3年短期	スキー(コンバインド)	平成3年6月20日 ～平成4年6月19日	ノルウェー	ノルウェー スキー連盟他	ノルデックコンバインド競技指導技術の研究とコーチングをノルウェーナショナルチームにおいて研修
81	田中 幹保	4年長期	バレーボール	平成4年9月20日 ～平成6年8月15日	アメリカ イタリア	アメリカ ナショナルチーム イタリアプロリーグ他	世界最強イタリアチームの技術、戦術の研究と修得 イタリアリーグの運営システムの研究、アメリカのスポーツ医科学から見た選手強化策
82	田口 陸	4年短期	ハンドボール	平成4年11月16日 ～平成5年11月15日	ドイツ	ケルン体育大学他	ヨーロッパでのトレーニング指導方法、理論の研修及び新戦術の研究
83	山口 香	4年短期	柔道	平成5年2月15日 ～平成6年2月14日	イギリス	ハイウイカム柔道センター	イギリス柔道の強化の実態他
84	筒井 大助	4年短期	野球	平成4年8月31日 ～平成5年8月30日	アメリカ	ジョージア南大他	アメリカ式ベースボールの考察
85	野地 照樹	5年短期	サッカー	平成5年12月8日 ～平成6年12月7日	イギリス	イプスウィッチ フットボールクラブ	イングランドサッカーのコーチング イングランドサッカーの指導者養成
86	斎藤 一雄	5年短期	相撲	平成5年10月3日 ～平成6年10月2日	オーストラリア	オーストラリア相撲連盟	オーストラリアのタレント発掘方法とジュニアからトップまでの選手育成システム、および体力強化の実情等についての研修
87	中西 英敏	5年短期	柔道	平成5年12月21日 ～平成6年12月20日	イギリス	エジンバラクラブ	英国および欧州を中心に欧州柔道の技術と指導法の研究および指導体制、強化体制ならびにトレーニング方法の研修(強化現状把握・指導体系・練習体系・強化システム)
88	金坂 広幸	5年短期	ライフル射撃	平成5年10月31日 ～平成6年10月30日	ドイツ	U. Sオリンピック シューティングセンター	エア・ライフル、スモール・ライフル射撃の指導技術およびメンタルトレーニング
89	成田 寛志	5年短期	空手道	平成5年10月23日 ～平成6年10月22日	アメリカ	ジョージタウン大学	選手強化法を含むスポーツ医学全般の研修 空手道における動作の分析 脊椎のスポーツ傷害の診断と治療の研修
90	清野 勝	5年短期	アイスホッケー	平成5年8月26日 ～平成6年8月25日	カナダ	カルガリー・フレイムス(NHL)他	カナダナショナルチームのスタッフとして、アイスホッケーのコーチ学、心理学、技術の習得
91	後藤 浩二郎	5年長期	馬術	平成5年11月18日 ～平成7年11月17日	フランス ル・マン	ル・マン乗馬クラブ他	総合馬術競技に係わる選手の育成と競技馬匹の調教
92	青戸 慎司	6年短期	陸上競技	平成6年11月7日 ～平成7年11月6日	アメリカ コロラド	コロラド大学 ボルダーク校	陸上競技、主として短距離走のトレーニングについて研修し実践的にトレーニングを積み競技力向上のための指導法を研究する
93	栗山 浩司	6年短期	リュージュ	平成6年10月16日 ～平成7年10月15日	ドイツ	ドイツ ボブスレー・リュージュ連盟 (DBSV)	リュージュ競技の科学的なトレーニングシステムの現状、ジュニア選手の発掘および選手育成プログラムについて
94	緒方 茂生	6年短期 7年短期	水泳	平成6年11月14日 ～平成8年11月22日	アメリカ ミシガン州他	ミシガン大学 アメリカ水泳連盟他	アメリカの水泳とコーチングの実習
95	佐藤 満	6年長期	レスリング	平成6年11月17日 ～平成8年11月16日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア州立大学	アメリカレスリング協会のシステムの研究トレーニング指導法及び処方研究 レスリング技術の研究
96	梶谷 信之	7年短期	体操	平成7年9月1日 ～平成8年8月29日	アメリカ サンフランシスコ	スタンフォード大学	体操競技の指導方法について 選手育成システムについて
97	東根 明人	7年短期	ハンドボール	平成7年8月30日 ～平成8年8月29日	ドイツ ライプチヒ	ライプチヒ大学	ハンドボール競技におけるトレーニングコーチ方法全般について
98	大門 宏	7年短期	自転車	平成8年2月2日 ～平成9年2月1日	イタリア	スポーツグループエキップ93	ロードレースの新しい技術、高度な指導技術の研究開発 諸外国の競技力の分析・戦術・戦法について
99	勝田 陸	7年短期	ラグビー	平成7年9月25日 ～平成8年9月24日	イギリス	イングランド・ラグビー フットボール・ユニオン	最新ラグビーとコーチングの理論と実際について ラグビー先進国の強化システムと内容について

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
100	佐藤 晃	7年長期	スキー (スペシャルジャンプ)	平成7年10月25日 ～平成9年10月25日	フィンランド	クオピオ市 プイヨスキークラブ	フィンランドジャンプトレーニング内容指導法(ジュニア含む)
101	内田 孝男	8年短期	陸上競技	平成8年9月30日 ～平成9年9月25日	オーストラリア	オーストラリア 国立スポーツ研究所(AIS) キャンベラ	各種測定、トレーニングの研修 コーチングの実施研修
102	西野 真一	8年短期	テニス	平成8年10月31日 ～平成9年10月30日	アメリカ	ウィローツリーテニスクラブ他	アメリカのジュニア育成システムの環境医療とデータの重要性 アメリカのテニス界について
103	杉藤 洋志	7年短期 8年短期	ボート	平成7年9月1日 ～平成9年8月31日	カナダ 他	カナダ国立コーチング研修所	コーチングの実践研修
104	田辺 陽子	8年短期	柔道	平成8年11月24日 ～平成9年11月25日	イギリス スコットランド	クサック柔道クラブ	イギリスの柔道強化策及び環境について
105	佐藤 浩明	9年短期	バレーボール	平成9年10月1日 ～平成10年9月28日	オーストラリア キャンベラ市	The Australian Institute of Sport(AIS)	オーストラリア・スポーツ研究所の心理的支援体制の調査
106	赤石 光生	9年短期	レスリング	平成9年10月23日 ～平成10年10月30日	アメリカ アリゾナ州テンピー市	ARIZONA STATE UNIVERSITY	アメリカ合衆国が、世界へ向けたコーチングの実習
107	松井 幸嗣	9年短期	ハンドボール	平成9年10月23日 ～平成10年10月22日	ドイツ ケルン	ドイツスポーツ大学ケルン	ドイツにおけるチーム強化の為の練習法・指導法と強化対策の実態及び指導者の育成
108	岡田 弘隆	9年短期	柔道	平成9年10月6日 ～平成10年9月30日	イギリス ロンドン	武道会	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
109	二宮 秀夫	9年短期	武術太極拳	平成9年9月26日 ～平成10年9月25日	中国 北京	北京体育大学	長拳三種目・武術全般のトレーニング法
110	鈴木 大地	9年長期	水泳	平成10年2月4日 ～平成12年2月3日	アメリカ マサチューセッツ州	ハーバード大学 アメリカ水泳連盟 他	アメリカにおける競泳のコーチングの実習
111	米沢 徹	10年短期	テニス	平成10年10月31日 ～平成11年10月30日	フランス アキテーヌ州 アルカッション市	アルカッションテニスクラブ	フランスの指導法と練習内容の把握、フランスシステムの把握、世界レベルのテニス研究、ヨーロッパテニスの研究
112	瀬尾 京子	9年短期 10年短期	体操	平成9年10月5日 ～平成11年10月4日	アメリカ オクラホマ州 オクラホマ市	Dynamo Gymnastics Club	アメリカでの体操競技における指導方法
113	本 博国	10年短期	ボクシング	平成10年9月8日 ～平成11年9月6日	ウズベキスタン タシケント市	"DINAMO"STADIUM PUSHKIN SQUARE 他	科学的トレーニング、指導法、栄養管理
114	持田 達人	10年短期	柔道	平成10年11月10日 ～平成11年10月31日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	フランスの国立スポーツ、体育研究所の指導体系
115	土江 寛裕	10年長期	陸上競技	平成11年1月15日 ～平成13年1月13日	オーストラリア シドニー・キャンベラ	NSW Institute of Sport, Australian Institute of Sport(AIS)	オリンピック地元開催に向けた強化体制と、競技力向上のためのトレーニング方法の習得
116	藤井 彌	11年長期	ライフル射撃	平成11年10月29日 ～平成13年10月27日	フランス パリ	フランス射撃協会	ジュニア期からの一貫指導システムの研究
117	菅野 範弘	11年短期	スキー(ジャンプ)	平成11年10月3日 ～平成12年10月2日	スロベニア ブレッド市 他	SLOVENIA SMUCARSKI KLUB TRIGLAV KRANJ	スロベニアにおけるスキージャンプの強化システム、トレーニング指導方法、転載におけるコンディショニング
118	三浦 華子	11年短期	体操	平成11年8月10日 ～平成12年8月8日	アメリカ ボイシー市	Bronco Elite Gymnastics Club Boise State University(BSU)	アメリカ体操競技におけるジュニア、大学生の指導方法
119	松本 真也	11年短期	セーリング	平成11年12月20日 ～平成12年12月18日	アメリカ アナポリス	United States Naval Academy	セーリング先進国のアメリカ合衆国におけるコーチング研修及び実態調査
120	玉村 健次	11年短期	ハンドボール	平成11年10月12日 ～平成12年10月10日	スウェーデン イエーテボリ市	IK Savehof Tus Shutterwald	北欧のハンドボール技術におけるチーム強化のための練習法・指導法、コーチング全般
121	増地 千代里	11年短期	柔道	平成11年9月11日 ～平成12年9月12日	イギリス ロンドン	武道会、ハイウィカム柔道センター キャンベラー柔道クラブ	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
122	山本 巧	11年短期	ラグビー	平成11年6月14日 ～平成12年6月10日	イギリス ケンブリッジ	Cambridge University Rugby Union Football Club 他	ラグビー先進国の強化体制及びコーチングに関する研修
123	畠田 好章	12年長期	体操	平成12年10月28日 ～平成14年10月27日	アメリカ カリフォルニア	スタンフォード大学	アメリカにおけるトップ選手への指導法及び練習環境や強化育成方法の研究
124	青柳 徹	12年短期 13年短期	スケート(スピード)	平成12年8月27日 ～平成14年9月12日	オランダ ブローニンゲン市	オランダスケート連盟	スピードスケート王国・オランダにおけるコーチングスキルの習得及び選手強化体制の見極め
125	渡辺 理貴	12年短期	卓球	平成12年9月14日 ～平成13年9月9日	イギリス ノッティンガム	イギリス卓球協会 他	ヨーロッパのクラブシステムとコーチング
126	金野 潤	12年短期	柔道	平成12年9月10日 ～平成13年9月9日	アメリカ コロラドスプリングス	アメリカ柔道連盟	USOCでの格闘技グループのコーチング方法アメリカ柔道連盟の強化システム
127	小島 啓民	12年短期	野球	平成12年10月13日 ～平成13年10月10日	アメリカ キューバ	スタンフォード大学 サンタクララ大学 他	アメリカ大学野球トップのスタンフォード大学チーム、キューバのナショナルチームのコーチング
128	田中 茂	13年長期	ハンドボール	平成13年8月18日 ～平成15年8月7日	スペイン バルセロナ	カタルーニャハンドボール協会	スペインのハンドボール技術及び練習法、指導法の習得
129	長井 淳子	13年短期	柔道	平成13年9月24日 ～平成14年9月23日	イギリス バッキンガムシャー	National Judo Academy, Cambely Judo Club, High Wycombe Judo Centre	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道の現状と選手強化の体制、指導法について
130	三野 卓哉	13年短期	ライフル射撃	平成13年9月17日 ～平成14年8月11日	ドイツ ウィスバーデン	ドイツ射撃協会 ブルガリア射撃協会	仕事と競技を両立することができるシステムの調査、ならびにこのシステムによる選手への指導方法
131	神庭 裕里	13年短期	武術太極拳	平成13年10月19日 ～平成14年10月18日	中国 北京	北京体育大学	長拳3種及び武術全般のコーチ研修
132	佐藤 吉朗	13年短期	トライアスロン	平成14年1月19日 ～平成15年1月20日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	ASIをトレーニング拠点として活動しているジュニアナショナルチームに帯同

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
133	斗澤 由香子	13年短期 14年短期	スキー	平成13年8月14日 ～平成14年8月28日 平成14年11月5日 ～平成15年12月27日	カナダ ヴィクトリア	National Coaching Institute(B.C)	フリースタイルスキーに関するコーチングの実戦研修
134	植田 実	14年長期	テニス	平成14年12月9日 ～平成17年1月23日	スペイン バルセロナ	サンチェス&カサル テニスアカデミー	コーチングの実践研修
135	吉田 孝久	14年短期	陸上競技	平成14年7月27日 ～平成15年7月26日	イギリス レスターシャー	ラフバラ大学UK陸連ハイパフォー マンズセンター (HIPC)	跳躍種目コーチング技能の修得
136	岩崎 恭子	14年短期	水泳	平成14年10月4日 ～平成15年9月30日	アメリカ ロサンゼルス	ミッションビエホ・ナダドーズ・スイミ ングクラブ	ジュニアコーチングの実戦研修
137	菅原 リサ	14年短期	体操	平成14年8月31日 ～平成15年8月31日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	コーチングの実践研修
138	和田 貴志	14年短期 15年短期	スケート(スピード)	平成14年7月25日 ～平成15年7月24日 平成15年9月1日 ～平成16年8月31日	アメリカ ソルトレークシティ	ユタ・オリンピックオーバル	コーチング及び強化システム研修
139	嘉戸 洋	14年短期	レスリング	平成14年8月16日 ～平成15年7月21日	ウクライナ キエフ	ウクライナ国立スポーツ専門大学	コーチングの実践研修
140	中村 行成	14年短期	柔道	平成14年8月18日 ～平成15年8月17日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟及びEdinburgh Club	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及び コーチングについて
141	松永 里絵子	15年長期	体操(新体操)	平成15年10月5日 ～平成17年10月4日	カナダ バンクーバー	War Memorial Gymnasium	選手強化育成システム及びコーチングの 実戦研修
142	林 享	15年短期	水泳	平成15年10月16日 ～平成16年10月15日	アメリカ バークレー	カリフォルニア大学バークレー校	コーチング及びトレーニング理論の研修
143	檜崎 教子	15年短期	柔道	平成15年9月19日 ～平成16年9月18日	アメリカ オマハ	Offutt Air force Base Judo Team	コーチング及びトレーニング方法の研修
144	近野 義人	15年短期	陸上競技	平成16年1月19日 ～平成17年1月18日	アメリカ デーヴィス	カリフォルニア大学デーヴィス校	中距離トレーニング及びコーチング研修、 バイオメカニクス研究
145	河野 正和	15年短期	卓球	平成15年9月23日 ～平成16年9月22日	イギリス ノッティングハム	英国ナショナルトレーニングセン ター、イギリス卓球協会	英国及び欧州各国の卓球コーチング システム、クラブ運営システムの研修
146	木村 孝洋	15年短期	サッカー	平成15年8月1日 ～平成16年7月31日	イギリス ロンドン	アーセナル	若手有望選手の指導・育成方法の研修
147	坂井 寿如	15年短期	アイスホッケー	平成15年8月6日 ～平成16年8月5日	カナダ エドモントン	Concordia大学	コーチングの実戦研修
148	山田 永子	16年長期	ハンドボール	平成16年8月1日 ～平成18年7月12日	ノルウェー オスロ	Bekkelagets Sport Club	ハンドボールの指導法、強化システムの研修
149	中村 兼三	16年短期	柔道	平成16年10月12日 ～平成17年11月23日	イギリス ロンドン	Budokwai柔道クラブ	コーチング、ナショナルチームとの交流
150	橋口 美穂	16年短期	体操	平成16年11月28日 ～平成17年11月30日	オーストラリア ブリスベン	Moreton Bay College	ジュニア選手の育成、ナショナル強化選手の指導方法、 環境施設運営面等の研修 (Moreton Bay Collegeで研修)
151	山田 晃豊	16年短期	バレーボール	平成16年9月29日 ～平成19年9月2日	イタリア ラベンナ	イタリア女子バレーボール・ナショ ナルユースチーム (CLUB ITALIA)	世界トップレベルのセリエAを中心に ヨーロッパトップリーグの視察と コーチング、チームプレーの研修
152	立花 美哉	17年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成17年10月13日 ～平成19年11月12日	アメリカ サンタクララ	Santa Clara Aquamaid Synchronized Swim Club	語学研修を主とし、シンクロの歴史の深いアメリカで指導を 中心にスポーツマネジメントを学ぶ
153	今村 文男	17年短期	陸上競技	平成17年9月9日 ～平成18年9月1日	イタリア サルツツォ	Scuola di Marcia e degli sport in Saluzzo	競歩選手におけるトレーニング方法とコーチングに関する 研修
154	原田 睦巳	17年短期	体操	平成17年9月13日 ～平成18年9月11日	アメリカ バロアルト	Men's Gymnastics Arrillage Family Center	選手強化に関する指導方法の研修および、大学組織の 競技運営方法の比較の調査
155	阿武 教子	17年短期	柔道	平成17年8月25日 ～平成18年8月24日	フランス パリ	INSEP (国立スポーツ体育研究所)	柔道競技人口が世界一のフランスにおいての指導方法や 他の欧州各国の柔道事情を学ぶ
156	工藤 昌巳	18年長期	スキー(アルペン)	平成18年5月26日 ～平成20年5月24日	オーストリア インスブル ック	オーストリアスキーチーム帯同	アルペンスキーコーチングについて学び、オーストリア国 家検定アルペンスキーコーチ資格取得を目指す
157	谷澤 英彦	18年短期	テニス	平成18年11月30日 ～平成19年11月29日	オーストラリア ゴールドゴースト	バッドキャッシュインターナショナル テニスアカデミー	ジュニアからプロ選手までの指導方法
158	松本 洋	18年短期	バレーボール	平成18年11月30日 ～平成18年12月27日	ブラジル リオデジャネイロ	Centro de desenvolvimento de Voleibol	ブラジルバレーボールの強化システムとスキル、プロフェ ッショナルリーグの現状について
159	岡崎 直人	18年短期	フェンシング	平成18年11月20日 ～平成19年11月19日	フランス パリ	INSEP (国立スポーツ体育研究所)	トレーニング方法全般の修得およびマネージメント
160	稲田 法子	19年長期	水泳	平成19年12月16日 ～平成21年12月14日	アメリカ アリゾナ フェニックス	Brophy College Preparatory	アシスタントとしてトレーニング方法を学ぶ
161	佐々木 耕司	19年短期	スキー(スノーボード)	平成19年8月26日 ～平成20年8月24日	カナダ カルガリー	National Coaching Institute Calgary	コーチング技術、トレーニング方法を習得し施設を視察。カナダの コーチングシステムやその構築背景を研究
162	村田 由香里	20年長期	体操(新体操)	平成20年12月19日 ～平成22年12月18日	ロシア イルクーツク	ディナモスポーツクラブ	ロシア新体操の選手育成システム及び指導方法について 学ぶ
163	井上 康生	20年長期	柔道	平成21年1月11日 ～平成23年1月10日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟	英語研修及びイギリスを拠点として、ヨーロッパにおける柔 道指導法及びヨーロッパ各国の柔道事情を学ぶ
164	山崎 一彦	20年短期	陸上競技	平成20年9月20日 ～平成21年9月19日	イギリス レスター	ラフバラ大学	イギリスのオリンピック強化システムと対策の調査および コーチングを学ぶ
165	猿澤 真治	20年短期	サッカー	平成20年8月13日 ～平成21年8月5日	フランス クレーズフォンテーヌ	フランスナショナルフットボールクラ ブ	フランスナショナルフットボール学院にて、U-13～15年代 の育成プログラム全般を学ぶ

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
166	白幡 圭史	20年短期	スケート(スピード)	平成20年6月1日 ～平成21年5月31日	オランダ フローニンゲン	ヘーレンフェーン室内リンク	スピードスケートコーチングテクニックおよび選手強化、選手育成システムを学ぶ
167	沖 美徳	21年長期	自転車	平成21年5月9日 ～平成23年3月31日	イタリア ベルガモ	Selle Italia-Ghezzi	自転車コーチング技術・語学研修及びイタリアサイクリングコーチングライセンスの習得
168	中垣内 祐一	21年長期	バレーボール	平成21年8月3日 ～平成23年5月2日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	世界トップレベルの指導法習得
169	中村 さなえ	21年短期	ボート	平成21年9月9日 ～平成22年9月8日	ドイツ ポツダム	Olympia Stutz Punkt Brandenburg	ナショナルチームのマネジメント、コーチング、選手育成システム、選手選考方法、コーチ育成プログラムを研修
170	小林 敦	21年短期	バレーボール	平成21年7月22日 ～平成22年7月20日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	各国シニア・ジュニア等トップチームの合宿にて指導者としての研修を行い、指導法、強化システムについて学ぶ
171	上村 美揮	21年短期	体操(体操競技)	平成22年2月27日 ～平成23年2月26日	アメリカ テキサス	Bela Karolyi Gymnastics Center	アメリカ体操界のジュニア育成システム及びその指導方法について学ぶ
172	神野 由佳	21年短期	スケート(ショートトラック)	平成21年4月27日 ～平成22年4月26日	カナダ カルガリー	Calgary Olympic Oval	ショートトラックにおける指導方法及び選手強化、選手育成システムについて
173	中村 健一	21年短期	セーリング	平成22年3月31日 ～平成23年3月30日	イギリス サザンブトン	Royal Yachting Association	ユース世代の育成・強化について学ぶ
174	上原 茉莉	21年短期	カヌー	平成21年10月11日 ～平成22年10月10日	ドイツ マグデブルク	ドイツカヌー連盟	日本カヌー界のレベルアップとロンドンオリンピックでメダルを獲得するための技術・トレーニング方法を研修する
175	高岡 寿成	22年短期	陸上競技	平成22年8月31日 ～平成23年8月30日	アメリカ マンモスレイク	マンモストラッククラブ	高地トレーニングなどの科学的なトレーニング及びアメリカの選手強化方法
176	三原 孝博	22年短期	卓球	平成22年8月30日 ～平成23年8月11日	中国 河北省	正定国家訓練基地	若年層からトップまでの育成方法
177	小館 操	22年短期	バイアスロン	平成22年6月21日 ～平成23年6月20日	オーストリア ザルツブルグ	オーストリアスキー連盟 オーストリアバイアスロン連盟	バイアスロン競技におけるスキー技術、射撃技術、指導法を習得し、バイアスロン連盟組織のあり方についても学ぶ。
178	塚田 真希	23年長期	柔道	平成23年9月7日 ～平成25年9月6日	イギリス ロンドン	エジンバラ柔道クラブ 武道会	英語研修、そして国外における柔道指導法および、諸外国の柔道事情を学ぶ。また諸外国コーチとのネットワークを構築する。
179	栗本 宣和	23年長期	カヌー	平成23年7月17日 ～平成25年7月16日	ハンガリー ブラハ	ハンガリーカヌー連盟	ハンガリーにおけるカヌー・カヤックスポーツの組織体制とコーチングシステム・強化プログラムのあり方について学ぶ。
180	柳澤 哲	23年短期	陸上競技	平成23年10月8日 ～平成24年10月7日	オーストラリア ブリスベン	Australian Institute of Sport (AIS)	各世代における体系化された練習方法の習得と組織としての運営方法
181	原田 早穂	23年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成23年5月15日 ～平成24年5月14日	マルタ共和国 スリーマ	Aquatic Sports Association of Malta	語学の鍛錬とともに、シンクロの中心であるヨーロッパにおいて指導力を磨く。
182	今泉 守正	23年短期	サッカー	平成23年7月13日 ～平成24年6月1日	アメリカ フロリダ	フロリダ州立大学(FSU)	US ODPプログラムの研修、IMGアカデミーでの育成プログラム研修等
183	橋元 郷	23年短期	セーリング	平成23年9月1日 ～平成24年8月31日	イギリス サザンブトン	国際セーリング連盟 英国セーリング連盟	英国における主にユース世代(U-19)の育成システム、およびセーリング組織の運営方法
184	佐本 睦	24年長期	レスリング	平成24年6月2日 ～平成26年6月1日	ドイツ ミュンヘン	Sportinternat Schifferstadt	ヨーロッパにおけるレスリングのコーチングスキルの習得と語学習得とプロクラブの運営システム等。
185	梅村 礼	24年長期	卓球	平成24年6月27日 ～平成26年6月26日	オーストリア ザルツブルグ	Werner Schlager Academy	欧州の強豪クラブにてヨーロッパの強化育成システムを学ぶ。
186	和田 武真	24年長期	フェンシング	平成24年7月25日 ～平成26年7月24日	ハンガリー ブタペスト	Budapest Honved(旧軍隊チーム)	元ナショナルチームの所属クラブにてビギナーからトップ選手に対し指導を行いながら指導技術、マネジメントを学ぶ。
187	谷本 歩実	24年長期	柔道	平成25年3月31日 ～平成27年3月30日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	欧州の強豪国の1つであるフランスにおいて、柔道指導法、強化システムの調査、研究及び周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
188	杉林 孝法	24年短期	陸上競技	平成24年9月15日 ～平成25年9月14日	スウェーデン ヨーテボリ	エルグリーテIS	世界トップレベルチーム及びコーチのもとでコーチングの研修を行うとともに語学研修を行う。
189	廣山 望	24年短期	サッカー	平成25年1月8日 ～平成26年1月7日	スペイン マドリッド	RCDエスパニョール	欧州のプロクラブにおけるトップ、育成、普及各レベルのコーチングを学ぶ。また、ヨーロッパの指導者ライセンスを取得する。
190	原 千華	24年短期	体操(新体操)	平成24年11月1日 ～平成25年10月31日	ベラルーシ ミンスク	National Center of Olympic Training in Rhythmic Gymnastics	ベラルーシのジュニア期の選手発掘・育成方法から、日本選手が国際試合で結果を残すための指導方法について学ぶ。
191	大戸 淳之介	25年長期	ボート	平成25年9月14日 ～平成27年9月13日	イギリス ロンドン	Staines Boat Club	チームマネジメント、コーチ育成プログラム他
192	昔野 幸一郎	25年長期	バレーボール	平成25年7月4日 ～平成27年4月27日	アメリカ	テキサス大学	バレーボール指導方法、世界レベルのチーム強化方法
193	高橋 豊樹	25年長期	ハンドボール	平成25年8月17日 ～平成27年8月16日	デンマーク スベンボー	オーレボイスコーレ ハンドボルトレーナリエ	ジュニア育成、コーチ育成システムおよびその指導方法、強化システムについて学ぶ
194	福島 晋一	25年長期	自転車(ロード)	平成25年11月18日 ～平成27年11月17日	フランス	SA Vendee Cyclisme	チームマネジメント、コーチング、フランス語、IF関係等
195	小田島 梨絵	25年長期	自転車(MTB)	平成25年8月2日 ～平成27年7月31日	スイス	Velo Club Tamaro	地域チーム運営、ジュニア選手のトレーニング方法、英語・イタリア語習得
196	中村 真衣	25年短期	水泳(競泳)	平成25年9月8日 ～平成27年9月7日	アメリカ ミッションビエホ	ナタドールズスイミングクラブ	普及、強化、指導者育成等全般
197	今井 美希	25年短期	陸上競技	平成25年7月1日 ～平成26年6月30日	スウェーデン ヴェクショー	IFKヴェクショー	跳躍(特に走り高跳)指導論・トレーニング論・トップアスリートの男性選手・女性選手の育成方法の違い、スウェーデン陸連関連
198	田村 奈津枝	25年短期	サッカー	平成25年6月13日 ～平成26年6月12日	ドイツ フライブルグ	フライブルグFC	トップチームの普及、強化、指導者養成等全般を学ぶ

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
199	黒田 真由	25年短期	体操(体操競技)	平成25年8月3日 ～平成26年8月26日	アメリカ テキサス	World Olympic Gymnastics Academy	ジュニア期の育成方法
200	塩田 義法	26年長期	水泳(水球)	平成26年11月18日 ～平成28年11月17日	アメリカ(ロサンゼルス)	USA Water Polo, Inc.	アメリカの代表チーム及び大学水球チームのコーチング、マネジメント方法、選手育成システム、コーチ育成プログラムを研修
201	鹿島 丈博	26年長期	体操(体操競技)	平成26年11月30日 ～平成28年11月29日	アメリカ(バロアルト)	スタンフォード大学	アメリカにおける体操競技の実態と強化について研修
202	出島 茂幸	26年長期	スケート(スピードスケート)	平成26年9月12日 ～平成28年9月11日	アメリカ(ソルトレークシティ)	ユタオリンピックオーバル	アメリカナショナルチームにてコーチング研修、育成システム、医科学サポートの活用方法、マネジメントについて学ぶ
203	谷川 聡	26年短期	陸上(ハードル)	平成26年7月30日 ～平成27年7月29日	アメリカ(フロリダ)	University of Central Florida ほか	アメリカにおけるトレーニング理論、トレーニングシステム、コーチング論を学ぶ
204	山尾 光則	26年短期	サッカー	平成26年9月10日 ～平成27年9月9日	ドイツ(ライムスバッハ)	IFC. Reimsbach	グラスルーツ・育成年代・トップチームのトレーニング研修、ゲーム分析、ゲーム環境等の調査等
205	坂尾 美徳	26年短期	サッカー	平成26年5月10日 ～平成27年5月9日	ドイツ(デュイスブルグ)	MSV デュイスブルグ	ドイツプロクラブの育成カテゴリーのプランニング・トレーニングの構築およびコーチング、プロクラブの普及・育成・強システムについて研修
206	土橋 登志久	26年短期	テニス	平成26年10月31日 ～平成27年10月30日	フランス(パリ)	フランステニス連盟 ほか	フランスのプロ・ジュニア選手の育成・強化システム、トレーニング方法、メンタルアプローチ、大会でのコーチング等ほか、国による強化・組織の運営システムを学ぶ
207	大島 杏子	26年短期	体操(体操競技)	平成26年10月12日 ～平成27年10月11日	アメリカ(サクラメント)	Elevate Gymnastics Academy	アメリカ体操界のジュニア選手育成システム及びその指導方法、跳馬の技術指導方法について学ぶ
208	長良 将司	26年短期	フェンシング(サーブル)	平成26年7月27日 ～平成27年7月26日	アメリカ(ポートランド)	Oregon Fencing Alliance	世界トップのナショナルチームの技術指導及びマネジメントを学ぶ
209	三木 二郎	27年長期	水泳(競泳)	平成28年3月14日 ～平成30年3月7日	イギリス(ロンドン)	イギリス水泳連盟	イギリス水泳連盟の運営システム・強化システム・指導プログラムを学びながら、ヨーロッパ諸外国コーチとのネットワークを構築する
210	岩渕 聡	27年長期	テニス	平成28年2月24日 ～平成30年2月23日	イギリス(ロンドン)	イギリステニス協会(LTA)	LTAがロンドンオリンピックにおける自国選手の金メダル獲得(男子シングルス)を成し遂げた強化策を学ぶ
211	白井 祐介	27年長期	ボート	平成27年8月27日 ～平成28年8月26日	デンマーク(コペンハーゲン)	コペンハーゲン大学	世界トップレベル選手のトレーニング方法、コーチングおよびサポートの実態や、医科学データの活用方法を学ぶ
212	遠藤 由華	27年長期	体操(新体操)	平成27年10月11日 ～平成29年10月10日	アメリカ(シカゴ)	North Shore Rhythmics	アメリカ在住のロシア人コーチのもとで技術・トレーニング方法、コーチング方法を研修し、またアメリカの段階別・レベル別選手育成システムとその構築された背景を研究について学ぶ
213	森 勉人	27年長期	体操(体操競技)	平成27年7月10日 ～平成29年7月9日	イギリス(バジルトン)	South Essex Gymnastics Club	イギリスにおけるジュニア・シニアへの一貫教育システムおよびナショナルチームでの指導方法を学ぶ
214	米満 達弘	27年長期	レスリング(フリースタイル)	平成27年8月31日 ～平成29年8月30日	アメリカ(ペンシルバニア)	ペンシルバニア大学	世界に勝ち抜くためのフリースタイルの専門技術及び戦略・戦術を修得し、強豪国の強化対策等の研修並びに世界のトップクラス選手情報を収集・分析する
215	舍利弗 学	27年長期	ハンドボール	平成27年8月31日 ～平成29年8月30日	ドイツ(ベルリン)	Fusch Berlin	欧州のプログラムや男子ドイツ代表チーム各年代のコーチングやスカウティング方法を学び、また海外遠征、合宿時に活かせるネットワークの構築をはかる
216	岩水 嘉孝	27年短期	陸上競技	平成28年12月20日 ～平成29年12月19日	オーストラリア(メルボルン)	メルボルントラッククラブ	メルボルントラッククラブにおける中長距離とマラソンの実践的トレーニングと指導内容を学ぶ
217	広瀬 統一	27年短期	サッカー	平成27年9月6日 ～平成28年9月5日	アメリカ(サンノゼ)	San Jose State University	フィジカルトレーニングの実地研修およびアスレティックトレーニング指導論の研修を行う
218	安食 真治	27年短期	スキー(アルペン)	平成27年6月12日 ～平成28年6月11日	オーストリア(インスブルック)	オーストリアスキー連盟	オーストリアにおけるスキー競技のコーチングシステムと強化環境の調査及びコーチングスキルを学ぶ
219	荻野 正二	27年短期	バレーボール	平成27年8月29日 ～平成28年8月28日	ブラジル(サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ)	ブラジルバレーボール協会	指導法や世界トップチームの強化方法を学ぶ
220	進藤 陸	27年短期	バイアスロン	平成27年7月27日 ～平成28年7月26日	ノルウェー(リレハンメル)	ノルウェーバイアスロン連盟	バイアスロン射撃術、クロスカントリースキー技術、トレーニング法およびその指導要領を学ぶ
221	大久保 茂和	28年短期	バレーボール	平成28年9月15日 ～平成29年9月14日	アメリカ(カリフォルニア)	アメリカバレーボール協会	アメリカにおけるバレーボールの最新コーチング及びトレーニングプログラムを学ぶとともに、アンダーカテゴリーにおけるalent発掘・育成プログラムを観察する
222	小川 秀樹	29年短期	サッカー	平成29年6月19日 ～平成30年6月18日	ドイツ(インゴシュタット)	FC Ingolstadt04	ドイツ・ブンデスリーガのクラブにおけるチーム強化及び選手育成、地域におけるプロクラブのあり方を学ぶ
223	久保 貴寛	29年短期	スキー	平成29年5月14日 ～平成30年5月13日	フィンランド(ヴォッカッティ)	Vuokatin Urheilupuisto	フィンランドの強化拠点となっているヴォッカッティを中心に夏季及び冬季におけるジャンプトレーニング、クロスカントリートレーニング、その他トレーニング内容の把握。
224	桑原 俊	29年短期	体操(体操競技)	平成29年8月29日 ～平成30年8月28日	アメリカ(スタンフォード)	Ford Burnham gymnastics gym	スタンフォード大学にて体操競技の指導、他国の指導・技術分析の方法を学び実際に指導を行う。
225	金丸 雄介	29年短期	柔道	平成29年4月5日 ～平成30年3月31日	イギリス(カーディフ)	Sports Wales National Centre	イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国のトップクラス、及びナショナルチームにおける柔道指導法、強化システムの調査、研究および周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
226	須藤 啓太	30年長期	サッカー	平成30年7月9日 ～令和2年6月9日	スペイン/バスク	ATHLETIC CLUB	世界トップレベルを走るスペインの育成年代の日常に触れ、スペイン人と日本人の技術、戦術、フィジカル、メンタル面における違いから日本人が海外でプレーする際にアドバンテージとなる部分を見極める。
227	河野 恭介	30年長期	スキー	平成30年7月10日 ～令和2年12月27日	オーストリア/インスブルック	Arlberg Ski club	アルペンスキーのコーチング理論、育成方法(日本との違い)を海外チームから学ぶ。
228	小原 英志	30年長期	スケート	平成30年8月10日 ～令和2年8月9日	カナダ/カルガリー	カナダスケート連盟 Canadian Sport Institute Calgary	カナダにおけるスピードスケートのコーチング技術の習得、カナダのスピードスケートナショナルチームにおけるサポート体制の調査、カナダにおけるコーチ養成システムの調査
229	近藤 大生	30年短期	テニス	平成30年11月1日 ～令和2年10月31日	フランス/パリ	フランステニス連盟	今年のデビスカップで優勝したフランスから、地域や県からトップ選手までの育成システムを学ぶ。
230	山村 宏太	30年短期	バレーボール	平成30年8月20日 ～令和2年8月19日	イタリア/ラツィオ	Fonteviva Livorno/ Paolo Montagnani	世界スタンダードのバレーボール習得と日本人に合わせたインバプション、そして日本人におけるブロックシステムの構築とコーチングスキルの向上について
231	古城 梨早	30年短期	体操(新体操)	平成30年8月22日 ～令和2年8月21日	カナダ/トロント	Jusco Rhythmic Gymnastic Club	カナダのチームで指導しているブルガリア人コーチのもとで、語学の研修と手具の技術やトレーニング等、各年代の指導プログラムを学ぶ。

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
232	中川 貴哉	30年短期	テコンドー	平成30年8月24日 ～令和2年8月23日	イギリス/マンチェスター	GB Taekwondo (GaryHall)	ナショナルテコンドーセンターにおける強化活動、運営についての研修、練習映像および試合映像の撮影方法および分析方法、活用方法についての研修。
233	松岡 佑起	31年長期	陸上競技	令和2年3月17日 ～令和3年1月22日 令和4年4月1日 ～令和5年3月31日	イギリス/ロンドン オランダ/ナイメーヘン イギリス/カーディフ	Saint Mary's University Global Sports Communication Cardiff Metropolitan University	中長距離種目のトレーニング方法、コーチング論、選手強化体制について学び、日本選手の強化育成に向けた新たなトレーニングプログラム、強化育成システムを構築する基礎とする。 ※令和2年3月 イギリス/ロンドンへ渡航後、新型コロナウイルス感染症の影響等により一時帰国。 ※令和4年4月 新型コロナウイルス感染症等により研修地をオランダ/ナイメーヘンへ変更 ※イギリスにおけるトップレベルのコーチング及びトレーニング方法を学ぶため、研修先をイギリス/カーディフへ変更。
234	塚田 圭裕	31年長期	バレーボール	令和元年8月7日 ～令和3年8月6日	アメリカ/ペンシルベニア	Temple University	世界レベルの選手・チームの強化方法並びにアメリカナショナルチームの視察・大学スポーツ(NCAA)の研究。
235	山中 武司	31年長期	アイスホッケー	令和元年6月26日 ～令和3年6月25日	カナダ/オタワ	KANATA Lasers	ジュニア世代の育成指導方法を学ぶ。アイスホッケーの新しい戦術の習得。
236	松岡 慧	31年長期	フェンシング	令和元年8月20日 ～令和3年8月19日	フランス/パリ	フランスフェンシング協会	フェンシング競技指導に必要な技術並びに技能習得。 強豪国の育成並びに強化システムの調査・研究。
237	福井 英郎	31年長期	トライアスロン	令和元年6月28日 ～令和3年9月30日	フランス/オルレアン	フランストライアスロン連盟	2024年パリオリンピックに向けた若手育成・強化方法を学ぶ。種目転向型・専門型などの選手発掘方法を調査する。
238	松原 英輝	31年短期	サッカー	平成31年4月1日 ～令和2年3月17日	フランス/ランブイエ	Toulouse FC 育成センター	フランスにおけるプロクラブの主に10歳から12歳までの育成プログラムを学ぶ。
239	見汐 翔太	2年長期	サッカー	令和4年1月13日 ～令和6年1月20日	イギリス/バーミンガム	イングランドサッカー協会 (FA)	イングランドサッカー協会 (FA) の強化拠点から、そのフィロソフィーとデータ分析の活用を学ぶ。 ※新型コロナウイルス感染症の影響等により、令和4年1月13日より研修開始
240	湯元 進一	3年長期	レスリング	令和3年8月28日 ～令和5年8月27日	ロシア/ウラジカフカス	ロシアレスリング協会	ロシア国内の育成年代からトップ選手までのコーチング方法及びトレーニング方法を学ぶ。
241	嘉敷 陽介	3年長期	ハンドボール	令和3年10月29日 ～令和5年10月28日	デンマーク/オーフス	Sports Academy in Aarhus	①競技力向上に関する具体的取り組みの調査・研究 ②コーチングの方法論に関する調査および実践
242	片桐 央規	3年短期	サッカー	令和3年9月19日 ～令和4年9月18日	ドイツ/ミュンヘン	バイエルン・ミュンヘン	選手へのコーチング方法を中心に、データの活用方法、育成や指導者への関わりなどを学ぶ。
243	青木 晋平	4年長期	バレーボール (ビーチバレーボール)	令和4年8月7日 ～令和6年8月6日	スロベニア/リュブリャナ	Ludus Beach Park Ljubljana	NFとクラブチームとの連携、という視点から、強化、育成、普及の関係性の研究など。
244	海老沼 匡	4年長期	柔道	令和4年4月14日 ～令和6年4月13日	イギリス/カーディフ キャンバリー	Welsh Judo Federation Camberley Judo club	語学の習得や様々な人脈構築を目的に研修を行なっていき、総合的スキルを向上させていく。
245	忽那 静香	4年長期	トライアスロン	令和5年1月10日 ～令和7年1月10日	アメリカ/コロラド州・ アリゾナ州テンピ	USA Triathlon	2028年の自国開催となるアメリカ(USA Triathlon)の強化策を習得。2028年ロスオリンピックの競技環境の把握・情報収集も兼ねる。
246	金城 芳樹	4年短期	スキー	令和4年12月5日 ～令和5年12月4日	スロベニア/プラニツァ	Nordijsko društvo Rateče-Planica	スキージャンプの技術向上のためのコーチング、ジュニアからシニアまでの一貫性のある強化育成システムなど。
247	藤本 一平	5年長期	ホッケー	令和5年9月5日 ～令和7年9月4日	イギリス/ロンドン	Indian Gymkhana Hockey Club	・ジュニアからシニアまで一貫性のある強化育成システム構築のための情報収集及び地域のホッケークラブと学校のクラブ活動の連携システムの研究など。
248	富田 恭介	5年長期	ハンドボール	令和5年9月1日 ～令和7年8月31日	ドイツ/ライプツィヒ	SC DHfK Leipzig	ドイツブンデスリーガ・プロクラブにおけるトップチームの練習法と指導法及び育成カテゴリーにおける育成プログラムとタレント発掘システムについて学ぶ。
249	大野 将平	5年長期	柔道	令和5年8月1日 ～令和7年7月31日	イギリス/スコットランド	JudoScotland South Platt Hill, Ratho Edinburgh EH28 8AA	拠点のスコットランドやイギリス国内のトップ柔道選手への柔道指導、地方クラブチームでの柔道指導を通してイギリスにおける指導法を学ぶ。
250	白鳥 歩	6年長期	バレーボール (ビーチバレーボール)	令和6年9月1日 ～令和8年8月31日	アメリカ/ロサンゼルス	Mbsand Volleyball Club USA Volleyball	コーチング及び強化育成バスケウェイ(NCAA)若年層からトップへの連携)、ナショナルチーム強化マネージメント及びアメリカ強化拠点設置に向けた視察と連携。
251	乙黒 圭祐	6年長期	レスリング	令和6年8月20日 ～令和8年8月19日	アメリカ/アイオワ州	アイオワ大学 Carver Hawkeye Arena	2028年ロサンゼルス五輪に向け、日本チームの強化に役立つ情報収集及び世界トップのアメリカで技術、トレーニング方法、強化育成システム、スポーツ科学的サポートの活用方法、メンタルアプローチ方法などの調査と研究
252	内山 由綺	6年短期	体操 (体操競技)	令和6年4月20日 ～令和7年4月20日	オーストラリア/メルボルン	メルボルン ジムナステックスセンター	体操競技におけるジュニアアスリートの段違い平行棒の強化。
253	平岡 拓晃	6年短期	柔道	令和6年9月1日 ～令和7年8月31日	アメリカ/シアトル	Official Business Name: Budokan Dojo	アメリカで学ぶトップアスリートを支える最先端技術や指導方法。

**スポーツ指導者海外研修事業
令和5年度帰国者報告書**

発 行 日 令和7年3月31日

編集・発行 公益財団法人 日本オリンピック委員会
〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号

Japan Sport Olympic Square13階

TEL03-6910-5957 FAX03-6910-5960

